44
283

援韓雄略

學海屈主著

援韓雄略序

癸巳十月。余訪學海先生於小川街。談及時事。慷慨激切。不自禁時朝鮮始有東學黨事。先生曰。吾讀舊史。

齊明帝時。百濟王義慈。暴虐失政。國民不服。遂爲新羅所滅。帝命救之。事垂成而

帝崩。不果行。恐今日之朝鮮。猶昔日之百濟也。余深以爲然。因謂先生曰。善。乃起艸。歲適暮。未成而止。今茲春。先生西遊數月。不暇執筆。荏苒及夏而東學黨之變起矣。適清人欲據以籠絡朝鮮。余復往謂先生曰。曩者之言果驗。請速成書以問於世何如。先

生乃續稿。數日而成。余受閱之。蓋根據正史。不謬和戰之事實。敷演時勢。不失彼我之人情。使一千年前之政略與一千年後之廟議。湊合傅會。躍然於紙上。如接其人而臨其場。嗚呼亦何其快也。夫貪土地。掠貨財。謂之貪兵。興廢絕。救危難。謂之義兵。吾援百濟義兵也。唐援新羅貪兵也。貪耶。義耶。國之盛衰。民之向背。於是乎決矣。天下之理無古今。無東西。其揆一也。能知其義者。可以讀學海先生之援韓雄略焉耳。乃爲之序。

明治甲午七月

東洋漁夫手塚猛昌撰

援韓雄略

學海居士著

百濟援を求む　福信唐兵と戰ふ

理無には候はねども。畏しこくも我氣長足姫尊が三韓を攻給ひしときより。臣禮を厚くして。信義を重くし。恭順を盡し。歲々の朝貢惰りなく。今我君の御世知ろし召す時まで。外蕃諸國に抜き出たる忠節を著しゝは。百濟より先なるは無し。志かるに新羅王金春秋無道にして。民を虐し。あまつさへ兵馬を縱まゝにして。我國の附屬たる百濟を犯しかすめ。遂にその王を殺し。國を奪へり。これ獨百濟の仇敵その臣子等は。不倶戴天の讎のみならず。我大日本國の罪人なり。もしこれを坐視して救はせ給はずば。我王

威これより顯れ。三韓盡く叛き去るのみならず。唐國の侮を啓き。兵馬を招くに至らんか。鎌足は。國を安くするをのみ主として。外國の侮を受るを顧みず。と席をうちて論ぜしは。これ唯一を知りて。二を知らざるの過ならずや。大華下阿曇比羅夫なりき。時はこれ靑明天皇即位の六年。新羅國王金春秋が。百濟國を滅し。その王義慈を殺しゝにぞ。その國の忠臣と聞えたる。鬼室の福信といふもの。兵を起し恢復を謀らんとて。救を我國に求めしかば。帝これを聞し食し。その忠義に感じ給ひ。救をやるべしとありて。軍議の席を開かれしに。大臣藤原の鎌足は財を費し。民を勞して。海外に兵を出すは。聖主の所爲にあらずと諫めしにぞ。比羅夫はこれを否みして。かくは爭ひしなり。さても百濟國と申は。その先扶餘の種より出でたり。溫祚といふ。初朝鮮の箕準燕人衛滿に逐はれて。海に浮びて韓地の金馬渚に居て。韓王と號し。五十餘の部國を統べ

治め。馬韓と稱す。その子孫溫祚の爲に滅せられて。箕氏の後絶えたり。祚の後ます〳〵強大にして。はじめ國號を十濟といひしが。遂に百濟と改む。神功皇后三韓を攻め給ひしとき。百濟王肖古といふもの。新羅がすでに圖籍を獻じて。降附せしときゝ。大に懼れ。自ら皇后の陣營に至り。頭を地に伏し。願くば世〳〵西蕃となりて。歲毎に朝貢すべしと申しければ。皇后その忠節を褒めさせ給ひ。內屯官家と定めて。我大日本國の附屬とせられけり。かくてその後。朝貢つねに怠りなく。新羅高麗まれば〳〵叛くとあれども。獨百濟のみは。いとまめ〳〵しく仕へ奉りて。二心無かりしが。應神天皇の御時。肖古の曾孫枕流といふもの。世を去りしに。その太子阿花年なほ幼く。叔父辰斯ほしきまゝにし。職貢を奉らず、天皇大に逆鱗まし〳〵て。御使をかの國に下され。無禮を責させ給ひければ。國人大に懼れおの〳〵き。忽ち辰斯を

誅戮して。罪を謝しけるにぞ。御使は即ち阿花をもて。國王の位に即けて歸朝しけり。

斯て又數世を經て。今王義慈に至り。武勇を好み。まば〳〵新羅と戰ひ。位に即きし二年に。將軍允忠といふものに命じて。新羅の地に攻め入りて。その大邪城を攻め抜き。國王の婿なりける金品釋を殺し。その妻子まで盡く誅戮す。春秋これを怨み。己の力足らざるを懼れ。やがて使を唐國に送り聘物を厚くし百濟の罪を鳴らし。これを伐んとを請ふ。時に唐國の皇帝李世民のちに太宗と號せし帝。これをきゝ。この機に乘りて三韓を平均せばやと。大將軍蘇定方に命じ。大軍を率ゐて。百濟に攻め入る。新羅王金春秋。馬歩軍を率ゐて。百濟西部の恩率官鬼室福信は先王の時より。登用せられて。一方の大將となりしが。國王義慈兵を好みて。屢〻戰を起すことをみて。これを諫めしかど。用られず。國都を去りて任射岐山に退きあたりしに。新羅王城に攻め入るときゝ。大に驚き。いそぎ援兵を率ゐて。これを救はんと。夜を日に繼ぎて軍馬を進めしかど。半途にして國王いはや。敵の手に捕はれしときゝしかば。怒に堪へず。吾王臣が諫を用ひ給はず。遂にかゝる大難に陷り給へり。君辱められるときは臣死す。いでや唐國の大軍のあと追かけて。王を奪ひとり奉るか。力足らざらんに於ては。その塲を去らず斬り死にせん。さるにても悪みても。悪みあかぬは。新羅王金春秋なりけり。隣國にありては。いかなる仇ありとも。好を結び盟を固くして。大國の侮を拒ぐ可きつは。讐の得たる者に非ず。我國を討つ事やはある。さらば遠き敵を討ち。近き仇なる新羅を伐ちて。讐國を恢復せんか。とやせましと。さま〴〵に思ひ廻らしつゝ。

その弟なる集斯が後陣より。馳せ來るを。途中に待ち。眞源驛といふ國都を去ると八里の地に。軍馬を止め。その意見を尋ねけるに。集斯今年二十一歳智慮逞きと兄におとらず。忠節の心さへ均しかりしかば。つく〳〵とこれを聞き。兄御の憤はさる事ながら。我國諸軍敗績して。英氣沮喪せり。智者も謀を運らすの勢なく。勇者も力を出すの心なし。今徒らに殘燼を駈りて。必死の戰を爲すとも。群羊をもて。猛虎の牙に向ふに同じ。一戰に敗北して敵に勢を添ふるのみ。ましてや唐國は強敵なり。その大將蘇定方はこれなみ〳〵の將に非ず。又新羅王も姦謀に長じ。全勝の勢に乘じ。その鋒向ひ近き難し。今戰を挑み給ふ時に非ずと覺えて候凡そ戰は唯智勇を恃むべきのみならず。必ず大義により援を得て。敵の氣を拉ぎ。我勢を長ずるとに在り。吾王すでに唐國にとらはれ給ひて。還幸の期ありとも覺えず。さればはやく王子の

うちに。然るべき賢王を擇みてこれをとり立て。その教令をもて。國中の義士を招き集め。又大日本國の天皇は仁慈深く。その國の兵威は萬邦にすぐれたり。されば國難を告げて。表を天皇の陛下に上り。援兵を請ひ給はゝ。吾先王世〳〵朝貢を脩めて。屬國の禮義を失はせ給はざるを。いかでかの國の君臣ともに。知らざる事やあるべき。この危急存亡の有りさまを見て。援兵を賜ふは必然の理なり。唯これのみに非ず。吾王の第三子豐璋の王子は吾國の質として。數年前より日本に滯留せさせ給へり。この君を奉じて。吾國王と仰ぎ給はゝ。天皇その忠節を感じ給ひ。援兵立所ろに渡海すべし。この義に從ひ給はずやと利害を詳にして諫けり。

願信これを聽き。げに和主の謂はるゝ所。感服せり。今みだりに唐兵を追はんとせしは。吾謀の足らざるなりき。さらばこれより引き

かへし。達率餘自信が中部久麻喜怒山に楯籠るよしをきけば。これと牒し合はして。いそぎ日本國に使者を參らすべしとて。諸軍に下知を傳へしをりから。忽ち王城の方よりして。數千の軍勢馳せ出けり。これはこれ誰が兵ぞ。新羅の金春秋は。かねてより鬼室福信が忠義に厚く。殊に扳群の勇士ときけば。百濟王を擒にすとも。福信を討ち取らざるに於ては。これその憂を貽すものなりと。唐の將軍蘇定方に請ひて。その部下の兵數千を留めて。なほ餘黨を平げんと望みしかば。定方即ち裨將劉敬之に三千の挺兵を授けて。これを春秋に與へけり。こゝに於て福信が任所より馳せ來るときゝ。さてこそこれを討んと出陣したるなれ。

春秋は近づくまゝに聲をあげて。やをれ恩率鬼室の福信汝の主なる百濟王義慈は。大唐の將軍に生捕られて。すでに中國におもむけり。太子王子はさらなり。その王后大臣まで。はや一人も王城にとゞまるもの非ず。今は何をか恃むべき。はやく兜を脫ぎ。軍門に降伏し。我に歸服せよ。暗を去り明に就き。害を避けて利に赴くは。これ智者の爲す所ならずや。無益の戰を爲して。二つなき命を失ふなと呼はりたれば。福信大ひに怒りて。汝新羅の黠奴。鵂鶹の慾を縱まゝにして。唐國の手をかり。我君王を擒にするとも。鬼室の福信こゝに在り。我命のあらんほどは。やわか汝が毒手に。我人民を陷らすべき。無益の詞戰せんより。我この刀をうけよと罵りければ。春秋きゝも敢へず。汝はこれ喪家の狗なり。我慈眼をもて。これを濟度せんと思ひしかど。餌を與へんとする人を。吠るこそいとにくけれ。その義ならば。汝をはじめ。與黨の奴原。皆盡く誅戮せんと。手のものに下知を傳へ。雨の如く射出す箭に。面を向くべくもあられねど。福信集斯は事ともせず。切り拂ひ搔きくゞり。馬を疾風の如く乘りまはし。新羅の兵弓をすて。矢を擲ち。身首

無二無三に切て入る。

處を異にするもの十餘人然すがの春秋も。さゝへかねてぞ見えたりける。

唐の援兵の大將劉敬之は。これをみて。百濟の討のこされたるものどもを。何程の事やあらん。我唐國の武威を見よと。擬兵をすゝりて。三尖兩刃の劍に。手々に藤牌を持たせ。福信が只今勝誇りたる横合より。喊を咄と揚げて擊てかゝる。唐兵は萬里の長途をおそれずして。かゝる遠境にも打入たる勇士どもなれば。その鋒の鋭きこと三韓の兵が及ぶ所に非ず。殊に李靖尉遲敬德等が訓練したる。これ節制の兵なるにぞ。忠義金鐵を欺く可き福信集斯も。あはや討果さるべく見えたるをりから。忽ちかなたの山陰より。軍旗を夕嵐に吹き靡かせ。馬蹄の響地を踏み轟かしてまいに聲を振り立。百濟の遺臣達率の餘自信。かねて鬼室恩率が忠節を知りて。國難に赴かんとせしに。時後れて。その期に逢はず。今幸に諸方の同志を募り。その勢五千餘騎を得たり。おくれ馳せながらも今日こゝに到着せり。吾王の仇。吾國の敵唐國にもあれ。新羅にもあれ。一人も生てはかへさず。かゝれやものども。進めや兵士。先王の時日本國におし渡して。修練せし弓矢の術は。いつの爲にか用べきと。身の丈に餘る大弓を引絞て。眞先に進む唐兵を。馬より下に射て落す。これにつゞく精兵ども。自信が日頃の訓練に。日本弓の手なみを見よと。差詰引詰。隙間も無く射かけたり。されば新羅はさらなり。唐兵の持つ弓矢は。寸尺短かくして遠に及ばず。力足らず。我矢はこれに及べども。彼れの矢は中途にして落散り。たま〳〵鎧に中れども。力弱ければ身に透らず。かゝれは兩軍いまだ接するに及ばずして。矢に中りて死傷するもの。はや百餘人に到りしかば。さすが剛氣の金春秋も。鄕ぎかねて。後陣を指して引き退く。唐の大將劉敬之大に怒り。我いやしくも。蘇將軍の將令を受

けて。新羅の援兵となりて。この戰にのぞむは。獨かれの爲のみならず。一戰に勝利を得て。我中華の武威を。東洋の群島に輝さんと思ふなり。いまだ日本の兵にあはざる前に。討漏されたる。百濟の奴等に敗られなば。何の面目ありて蘇將軍に見ゆべき。死ねやものども。死ねや〳〵と。丈八尺の鉾を打振り。馬を飛ばして。鬼室の福信を目がけて撃てかゝる。福信は事ともせず。同じく長矛を振てあたり合ひしが。劉敬之が鉾は鍛に鍛ひし錬鐵なれば。忽ち福信が矛を折て。兩段と爲し。ひるむ所を。嵩にかゝり。唯一撃と打おろさんとせし所に。兵と飛來る一枝征箭。憐むべし鯁勇無雙の劉敬之は咽を射られ深手に得たへず。馬より眞倒に落て死してけり。その時餘自信は。弓を提げ聲荒らげ。唐の大將は斯くいふ餘自信射てとりしそ餘すなものども。一人も殘らず射斃せと。勵しき下知に離かは。これに勇まざるべき。只是大山の崩れ。蒼海の湧くが如く。

轟然として攻かゝれば。唐兵大に辟易し。兜を脱ぎ矛を伏せ降服するもの二百餘人。のこるは。あはてふためき。逃れ走れば。金春秋は。一支もさゝへえず。命かぎりと逃たりける。鬼室の福信集斯。思はぬ味方の援を得て。敗を轉して勝と爲し。あまさへ。唐兵をさへ。生捕ければ。悦ぶこと大方ならず。まばらくあたりの岡の邊に。人馬を休すめ。餘自信の恩を謝し。味方の死傷を撿みするに。思の外に死するもの少く。傷つくものもわづかなれば。手初よしとさゝめきて。こゝに一日逗留しけれど。王城より討て出る氣色なければ。軍馬を率ゐ生捕をゐて餘自信ともに。王射岐山の城にかへりけり。斯て鬼室福信は。弟集斯と餘自信を城の議事廳に迎て。士卒とゝもに厚く饗應し。さて集斯が援兵を日本に請ひ。さらに質子として日本におはします豐璋を迎て。百濟王とし。人心を收攬せばやとの說いかに評議に及びけり。餘自信これをきゝ頭を傾け鬼室ぬしの仰は

さる事ながら自信は豐王子の御事は。百濟國の御爲に然る可らずと思へり。他の王子を撰みて立て給ふにしく事あらじと。思の外の答へなりしかば。集斯はこらへず進み出で。餘君は時勢に精しく。利害を明にし給ふとは。漢の諸葛武侯に劣らずと集斯等固く信じ申しに此仰こそ心得ね。豐王子は本國にいましゝとき。させる賢徳も聞えねど。當時日本國に在留ましゝ文學に心をゆだね。武藝韜晦はかの國の英傑と聞えたる。中臣鎌足の教を受け。出藍の聞あり。ましてや日本の天皇の眷顧最厚きよし承れば。吾國の大援またこの上や有べき。もし此君をおきて。外に王子を求めむには。その人無きにはあらねども。日本國の大援を得るによし無く。敗亡の殘黨を驅り集むるとも。はかゞしき精鋭なく。殊に軍器の備無し。此義をいかにし給はんとは思し召さるゝぞといひければ。福信もまた愚弟の意見も。集斯に同じ。大國の援を借らざれば。久を保つこと難く。

機會を失はゝ。功を爲しやすからず。はやくこの儀に決し給へと。詞を盡して勸めしに。餘自信は默然として。ましばし詞もあらざりしが。やゝありて。恩率今猶鷲夢樓の事とは。如何なるゆゑぞ。

豐璋情を縱まゝにす　福信禍を釀す

晝櫻春深くして。楊柳その綠の色をまし。翠帳陰靜かにして。春風自ら曖を成す。こゝは百濟の王都なる。王子の豐璋が宮殿にして街に臨みし一樓。今を去ること五年の昔なりき。豐璋の王子は。數日の酣醉に身病むが如く。一杯の冷水に渴を醫し衣服を刷ひ朱漆の欄干に倚りて。街の景色を打眺めてあたりけり。斯る所に此方の御柳の綠いと繁き陰より。ほのかに馬の蹄音聞えて來るものあり。とみれば一箇の婦人にして。身には大紅錦邊の長衫を着し。唐綺の領巾寬

やかに肩に垂れ。頸には管珠曲珠の或は白く雪の如く。或は碧く琉璃の光つやかなるを懸け。薄綠なる袴を踏て。白き馬に唐鞍置きその身を横に駒りたるが。手に細き革製の鞭を袖ぐゝみに持ちつゝ徐かにあゆませたり。年は廿二三にやあるべからん。色白く玉を欺くばかりなる。そが頬のあたり薄紅に香はしたるは。臙脂の色を染めしにはあらで。自らなる天性の美麗その唇の紅はまた見ぬ日本にある〻ばかりなり。今しもこの柳の絹に名ある櫻花の蕾にやと疑がはるゝ一聲二聲打しきり鳴く鶯の聲。耳に入りしにや。首を擡げてうち仰ぎたる眼のうち波を湛て思はずほゝ笑む靨には。萬金の價あるべし。端なく王子が視おろす眼と。視あぐる美人が眼と一所に合ふたる不思議の邂逅。さと赧らめしかの美人いはやくも頭を垂れて一鞭かろく馬に加え。足掻を早め忽ち見えずなりにけり。あはれめでたき美人かな。あとに王子は。呆然として夢の如く。こ

の三韓はいふもさらなり。山水美秀の聞ある大日本の國にだもかゝる麗はしき人やはある。さるにてもいかなる人の女にや。よしや主ある花なりとも。この國に住むからには。一枝手折られぬ事あらんや。いかでその素性を聞まほしゝが。いろに心を惱ましゝが。王子が許に近く參り仕ふる恩率の執得といへるものを召して。かの女子の婆かたちを詳に告げ。何物ならんと問しかば。執得は打案じ。殿下此懸はとても協はせ給ふまじ。世に麗はしき女子少からず。この女子のみは思ひ止まらせ給ふべしと。いと苦々しげに答へしかば。王子はきゝて大に怪み。そはまた如何なるものゝ娘ぞ。又いかなるものゝ妻なるぞと問へば。執得。君にもかねて知ろし召さむ。かれは恩率鬼室の福信が妾にて。名を桃葉と申ものなり。福信去年の冬。妻におくれしが。いかなるものゝ媒しけん。かの妾を娶り候ひぬ。

かの婦人は年若けれども。智慧かしこく。絲竹の技はさらにもいはず。文學の才も拙からず。近頃日本國に行はるゝ。和歌とやらんも。かの國の博士がこゝに御使としてまゐりし時。學びしとて。これをめでゝ詠むよしをうけ給はれり。素姓は委しく聞き候はねども。かの博士のもとに參りしといへば。さる富む人の子にもや候らん。福信は年四十餘にして。髭がちにむづかしげなる男なるに。いかにして娶り候けん。人これを牲みぬ。かゝる主ある婦人なれば。戀慕はせ給ふとも。そのせんあるべからずと。事詳に告しにぞ。王子いといその人がらをきゝて。慕はしさに堪へかねゝ。駿馬痴漢をのせて走り、拙夫は佳人に伴ふて眠るといひけん。福信は拙夫とはいひ難けれども。さりとて婦人の爲に思はるゝ。風流才子とも思はれず。汝は世に勝れたる解事の人なり。いかで吾が爲に。いかなる隙なりとも索し求めて。心に從かはするの計畧なきや。もしこの望を果さす

るならば。吾父、君にすゝめ申て。汝を厚く登げ用ゐ。福信の上に在らせん。いかに〳〵と。わりなく口説きて止まざりければ。執得はその性邪まにして。利を好み。その身の不才を顧みず。いかで耳きく離れ叛けり。太子おはしまさせども。その才器はこの豐王子に及ばず。をりを見て太子を廢して。吾王淫虐無道にして。國人多の功をもて。重き位に陞るべしなりと。日頃心に巧むよしあり。今この言をきゝて。竊に喜び王子の慾を遂げさせなば。吾必ず重く用られん。まからんには。王子を位に即けて。吾國の宰相たらんと甚やすしと。思案を定め。表には最苦しげなる面色し。やうやくにして。その意に從ひ。成ると成らざるは。某が知る所に候はねども。力を盡して見候はんとありしかば。王子は手を合し伏し拜み。まからば。いつを期して思を遂ぐ

可きといひしに。 兢得はあたりをみかへり。 王子の耳に口を寄せ。
ひみやかに告るよしあり。 鬼神も悟り得ぬ。 この密謀。
こは小星をともなひて。 いづこにか赴き給ふ。 花はやうやく散りかゝれども。 春の末は猶見處多し。 世尊寺の法會は。 けふ中日と覺ゆ。
そのかへさ路にやおはさぬか。 見給ふごとく。 我等も荊婦を伴ふたり。 久しく公務の忙はしさに。 ゆる〳〵語らひ申さゝることはや一月餘になりにたり。 日は暮るとも月はよし。 御溝河の柳の綠なるもまたすてがたき氣色ならずや。 一盃酌みて。 物語らば。 日頃の鬱を
も慰むべし。 いかでもろともにと誘ひしは。 これ恩率の兢得夫婦なり。 こなたの贔信と。 その妾の桃葉は。 馬をとゝめて打笑ひ。 贔信
はまついひけるは兢公。 御身はいつも健にて。 心優かに花見て過ぎ
給ふこそ羨ましけれ。 吾儕はさらるゝごとく。 君王の御身近く事へ
まわらすれば。 日毎の出仕に暇無く。 先考の忌日だに。 墓に詣ふで

て。 香花を手向くる事だにかなはず。 けふ幸に少しの暇を得たれば
斯くは。 うちつれて世尊寺にもむきしかへさなりとものがたれば。
桃葉もうち合笑み。 恩率の君の夫人にてやおはします。 嬶女は名を
桃葉と申侍り。 故の夫人の世にいまそかりしとき。 御側に侍りしが。
世を去り給ひしのち。 御遺言にて。 君に事へ奉る事とはなり侍りぬ。
恩率の君には。 しば〳〵御眼を給はれども。 夫人にはけふぞ初めて。
ま見へ奉る。 賤しき身にては侍れども。 御心隈なく語らはせ給はゝ。
嬉しくこそと恭〳〵しく述たりけり。 そのさま愛敬づきて。 誇りかならず。 温和しくして。 物つゝましからず。 げに才色一雙の美人とこそ
は見えたりけれ。
兢得は。 已が妻の答へをもまたず。 進みより。 御身は桃葉にておは
しけり。 かねて達率ぬしの側近く仕へ給ひて。 眞心おはすよしうけ
給はりぬ。 けふは。 よくこそぬしの御供をばし給ひけれ吾妻も見ま

ゐらせたきよしいひて。侍りしに。まことによき折なれ。いざこれより。ぬしもろともに。御溝河のほとりなるかの世にきこえたる鶯夢樓にのぼりて。河の氣色をみて。ぬしと一杯を酌まばや思ふに。吾妻も御身に親しうなしまゐらせ。日本にてもてはやす。和歌とやらん敎をもうけ給はらん。なう吾妻とて見かへれば。執得の妻蘭枝といへるが。いとよくうちゑみ。桃葉のおもと。わらはゝ執恩率の妻に侍り。女子は女子どちと申せしに。いざもろともにと。はやくも桃葉の手をとりて。誘ふにぞ。福信。今は辭するによしなく。さらば。仰に從ひまつらんと。うけがひければ。執得夫妻は喜びて。小者に馬をひかせ。先に立つゝともなひけり。

この鶯夢樓といへるは。百濟王都の第一の酒樓にて。唐土の風をまねび。朱欄碧檻。高く聳へて。玉簾錦帳深く垂れたり。前なる御溝河は。王城の溝につゞきし清き流れなれば。やがて御溝河と名づく。

この碧水清き川を隔て。遙に見ゆるは。錦城山とて百濟王が累代陵墓ある所なりき。折から春の暮なれば。綠樹青蒼としていさぎよく。この日は。天も麗かなるに。また一際のながめあり。執得らはやくもこの樓上なる。最も潔くしつらひたる一間にのぼり。まづ椅子をとりて。福信を請じ。己はその側に坐し。己が妻して桃葉の傍に居らしめたるに。福信あはてこれを辭し。恩率なにとて。かくはせさせ給ふ。位階は某御身のうへなれども。そは朝會などの時にこそあれ。けふはかたみに打解て。酒のみ樂しまむと思ふなるに。かゝる禮儀に及ばむや。まして賤妾を夫人の傍に居らしめ給ふは。某の心やすからず。御身は某と對座し。賤妾は次の間に侍らし給へといへば。執得から〳〵と打笑ひ。あな達率の物堅き。執得は麁鹵の武人いかで和殿に對して主客の禮にや及ぶべき。桃葉は侍女とはいへど。聞こえたる賢婦人なり唯某にまかしたまへとてきゝ入ず。樓の仕女

を召し。酒肴を命じ。さきりに物語に興を添ふれども。そのいふ所は。閭巷の雑談。酒肉の鄙語に過ぎざれば。福信は心にこゝろよからず。されども然すがに。中座すべくもあらねば杯を受といへども。少しも酔はず。又桃葉も就得が妻に。さば〳〵盃を差れて。もとより多くも飲まぬ酒なれば。これも又いと困じにたり。かゝるところに櫻嬢なるべし。年頃廿二三ばかり。なへたる衣きたるが。鬢のほとりに。合歓の花を挿し。面に白粉を施し出で來り。手に何にかありけん。書翰めくものを携たり。鬼室どのやおはする。王子の宮中より。御使の候といひつゝ。さし出しけり。福信は何事にや。またいかにして予がこゝに遊び居たるを。知りにけんといぶかしく思へども。いそぎ件の書の封を拆くに。こは王子の宮に侍る官人の傳達にて。今日王子唐詩の御會を開かるべきよし仰あり。いつもの如く。鬼室の達率を給てまゐり候へ。と仰ありければ。御宅にまゐりしに。

御墓まふでのよしきゝて候ひしかば。此使に仰せて。迎へ奉るものなりとあり。福信はかゝる事しばし〳〵ありけるにぞ。げにけふはよき日なれば。王子の詩の筵を開かせ給ふも興無に非ず。されど就得ぬしの本意なく思はせ給ふもいと便なしと見かへれば。就得はきゝて。いなとよ王子の召は。私事に非ず。いかで我等に斟酌あるべき。桃葉どのは。我妻のなほうけ給はる事もあり。物語も多かるべし。御身はこれより直に王子の宮に參り給はんこと然るべけれ。某は妻といふもに。今まばしこゝにとゞまり。夕告る頃。桃葉どのを。御館におくりかへすべし。といひければ福信は打喜び。幸にけふは。墓參すとて。公服を着したれば。家にかへりて。衣服を改むるに及ばず。賤妾をだに。恩率ぬしの送りかへさせ給いむには。これより王子の宮にまゐりなん。やよ桃葉汝は。夫人にともなひ申て。日暮ぬほどにまかり候へと。就得夫婦に會釋して、立上んとしたりければ。

桃葉は。主人の君の立出給ふに。妾ひとり留まらんもいと恐多し。わらはがこれより御館にかへりて。まち奉らんと。いふを福信否。執恩率ぬしの、ねもごろにとゞめ給ふを。辭し申すはよろしからず。汝はこのまゝ居るこそよかれと。いそぎこゝを立出て。王子の宮へ。いそぎけり。

あとに桃葉は。いとさびしげに。うち眺めてゐたりけるに。執得夫妻はなぐさめて。なほ種々の肴をとり出させ。もてなし大方ならざりければ。桃葉もその慇懃のふるまひに。心ゆるして。我にもあらで醉にけり。凡そ婦人の醉たるは。面赤ふして。鬢の毛みだれ。着たる衣なども。しどけ無けに搔やりて。見惡きもの多けれども。桃葉は日頃つゝましき性質にて。露みだれたる節も無し。されば醉といへども。おもての色やゝ紅を帶るのみ。その容色きよらにして。つねにもまして麗しかりき。執得は桃葉がやうやく醉を帶びしとみ

て。何思ひけん。妻の耳に口さしよせ。うちさゝやけば。妻はしば〳〵うなづきて。次の間におもむきぬ。桃葉はかくとも知らず。醉ていと苦しければ。椅子を立て椽に出で。闌干によりて。川の氣色を打眺めゐたりしに。俄にうしろに。人の足音聞えたり。執得の妻にやと。心ともなくみかへれば。執得夫妻にはあらずして。衣服最綺羅やかなる。年二十三四ばかりの男なり。その衣帽の製作。凡人に非ず。高貴の公子にやと。驚きて。坐を起んとしたりしに。件の男は。なれ〳〵しげに。側にさしよりて。物いひかけらるゝに。此方はあきれて返り言だに得せざるをなほさま〴〵に言慰さめ。われは執得が知るものにて。何某と呼ばるゝものなり。御身いまだ鬼室の側仕とならざりし初より。いと暮はしく思ひしものを。などて情無くものせらるゝやらんなど。胸つぶるゝばかりの言を。搔口說かるゝに。桃葉はます〳〵あきれ。こは何人ぞ。人の妾たるものを捕

へて。辱むとせらるゝは。恩率ぬしの夫人は。いづこにやおはします。あなむくつけしや。誰か〳〵と泣叫びて。のがれ去むとするほどに。かの男は雙の手をもて。桃葉をしかととらへ。少しも離さず。おし立ちわざをもせんずる氣色なり。女子の聲はこの室にや何ものゝ狼藉ぞ。しや捕へてくれんと罵りて。樓の階子をのぼり來る音。いとあらたかに聞えければ。かの少年は大におそれまどひ。桃葉をうちすてゝ。あはてゝ逃れ出にけり。樓にのぼり來れるものは。つと戸を推し開きて。入りたるをみれば。これ他の人にあらで。福信とは。日頃睦じき中なる餘自信なりければ。桃葉は亂れし裳裾を搔き刷ひ。鬢のほつれを搔きあげて出で迎へ。こは餘君にておはしけり。危き所をいかにして。知られまつりけん。救はせ給ふ事のうれしさよといふに。餘自信はうちきゝて。否。余は御身の危きを知りしに非ず。さきに御身の主人福信ぬしに。竊にかたらふべき事あり

て。かの館におもむきしに。墓詣にとも出給ひしときゝ。あとを追ふて來つるに。俄にこの樓上にて。男女爭ひいどむが如き。聲をきゝつるをもて。うちも置れず。走りてこゝに來つるなり。さるにても。唯今御身に無禮せし少年は。いかなる人ぞ。今いづこへ逃去りにけん。福信ぬしはおはせばやと問はれて。桃葉はつゝむべき事ならねば。執得夫妻にともなはれて。こゝに來りし事と。主人は王子の宮に召されて。さきに詩の御會に赴きしのち。測らずかの高貴の躰なる少年の爲に。せまられしことを告げしかば。餘自信は大に驚き。しばらく頭を傾けて。思案せしがうちうなづき。よし〳〵某前後の事によりて聊推量せるよしあり。そは今まうちつけに。御身には語りがたし。福信ぬしに對面のをり。詳に物語らん。又かの惡少年にあひ給はゞ。いかなる憂目を見んも知るべからず。早く館にかへり給へとて。樓婢を呼びて。輿をあつらへしかば。この頃婦人の乘る

可き手輿ありて。これを舁くものも。このほとりに有りしかば。時を移さず網代輿をもて來にけり。桃葉は恭しく餘自信に恩を謝し。件の輿にうち乘りて。鬼室の館にかへりけり。餘自信はあとを見送り。さても執得の佞奸なる。何ものに賴れて。かゝる狼藉に及びけん。いといぶかし。聞が如きは。その少年の衣服きはめて綺羅やかにして。尋常富豪の人とも覺えずとあれば。口のうちにてつぶやきつゝかたへを見かへるに。金の笄一條椅子の下に落てあり。心と もなく拾ひとるに。これ純金にて製造せしものにて。蟠龍の彫刻あり。王子の帽をとめらるゝ。髻にさすものなれば。自信は思はずあとばかり。再び驚き思はずこれをとり落しゝに。椅子の脚に當りて。鏘然として響あり。

福信は蔦夢櫻を出て。王子の宮におもむき。召により參りしよし。官人をもていひ入れしに。官人は例の別室に福信を待せたりしが。

やゝ一時あまりありて。出で來つ。王子は詩の御會を開かるべかりしに。俄に國王の召の事ありて。唯今參朝せられたり。福信には。いと無興なるべけれども。その よし申し候へとの。御事なりとあり しかば。王子が例の輕忽なる。そのまゝ己が館にかへりしに。かゝる事あれば〳〵あれば。恠まず。しけん。迎ひの輿をや遣るべきと思ひあけるに。やゝありて桃葉はいまだ歸りこず。彼はいかにかへり來つ。その面地の常ならぬに。福信はよしを問ふに桃葉はありしまゝにさゝやき告げ。餘君の助によりて逃れ來ぬるよしをいひしに。福信はあきれ果てゝ。執得の所爲を痛く悪み。餘自信が助けを喜び。その貴公子が誰ならんと。不審きと限もあらねば。桃葉にゆきて。尋ね問はゝやと思ひしかば。その明る日自信來りて安否を訪ひ。且去る日の事に及びしかば。福信はまづその救を謝し。貴公子は誰なるらん。心づくよしおはさずやといふに。自信は懐中

より。かの金弊をとり出し。達率これに見覺あらんとさし示せば。禰信これをつら〳〵みて。さてはかの王子にてはしゝか。王子は吾王が愛子にはおはすれども。太子はすでに儲位に備はらせ給へば。王位の御望なく。封邑多く給はせたるをもて。驕奢に耽らせ給ふよしうけ給はりき。されども。今まで人の妻妾に戯れ給ふとは。聞も及ばざりしが。如何なる。天魔の魅入れたりけん。斯る戯けき所行こそあさましけれ。これも長き事ながら。吾王賢臣を退け。奸邪を用ひ。日夜宴樂を縱まゝにし。政事の是非を問はせ給はず。且武勇に誇り。兵馬を驅りて。隣國を惱ましし。婦人を愛し聲色に耽らせ給ふをもて。その風自ら王子にまで及ぼし給ふ故なるべし。そも如何にしてよからんやといへば。自信はともに歎息し。まことに達率の給ふ如く。頃者の形勢をみるに。國家の亂離近きに在り。いと憂はしき事になん。さりながら王子の事はもとより密事なれば。決して再、

び逼らせ給ふとあるべくも有らず。又この頃うけ給はれば。日本國より吾百濟に質子をかの都に上るべきよし勅命ありと。されば太子を除きて。年長ぜらるゝもの。豐璋君の外無ければ。近日質子としていひけれは。禰信うなづき。一賤妾の事はいふにし足らず。唯憂ふべきは國家の事のみといふに。餘自信。我等もこゝに心を勞し。きのふも新羅國が。去る日唐國に使を發し申し請ふよしありときゝ。その利害を料りかね。御身の意見を聽かんとて。尋まねらせたるなり。志かるに。俄にかゝる事出來て。そのまゝに打過ぎにき。といひければ。禰信。げにその事なる。我も大に疑ふをもて。敢國の親窯料りがたしと。明日は。君王を諫め奉らんと思ふなり。とありけるにぞ。自信もその志に感激し。相別れしが。果して禰信は上書して。意見を獻ぜしかど。王

は執得等が佞諛の言を信じ。これを用ひざるのみならず。その妄言の罪を責めて。任射岐山に貶謫せらる。こもまた執得が。己が謀成らずして。止みたるを怨み憤り。窃に王に譖構せしなるべし。されば。こ度福信が豐璋王を日本國より迎へて。國王に仰がんといひしをきゝて。自信は。鴈夢樓の事を忘れ給ひしやとはいひしなり。福信は餘自信が。往事を語り。豐璋王子が國を有ち給ふべき器量あはさゝる事を知りて謙めしを。道理ならずと思はねども。又再び思ひを運らすに。王子か過ちは全く女色の私過にすぎず。久しく日本國に在留して。かの國の美風を學び博士ともの經史の講をきかせ給へば。古き過を悔させ給ふ事もあるべく。かの地に移り給ひしより。既に數年を經たるに。させる御過ありとしも聞えねば。今に至りて。讐悪を咎めて論ずるは。君子の道に非ず。まして此度の義擧の大國の救援を得るに非れば。いかで唐國の大兵を破りて。狹復の功を致

す可き。彼に就き此に就き。日本國に使を贈り。豐璋王子を迎へ奉るに若くとあらじ。昔の事を思へば。某に於て。心よからず思へども。私怨をもて。公道を害す可きに非ず。かの孔子もいはずや。小過をゆるし。賢才を擧げよと。強敵前に在り。狹復の擧近にせまれり。事遅々す可らずと。利害を述べ。公道を論じければ。然すがの餘自信も。福信が私無き誠心に折れ。集斯もまた。心のうちには。危ふみ思へども。さし當りたる道理に從がはざることを得ず。さらはとて。日本國の齊明天皇の六年九月。西部恩率鬼室福信及び弟。達率鬼室集斯。達率中部餘自信。達率滿智。達率木素貴子。達率貴智等。久麻喜怒城に會合し。軍議一決して。集斯に命せて。一通の表文を作らしむ。集斯は幼き時より日本國に遊學して。博士に就きて。學ぶと數年。文章に工みにして。筆をとりて。卿を起す。その署に。筆札に妙を得たりければ。即坐に

唐人率我蝥賊。來蕩搖我疆場。覆我社稷。俘我君臣。而百濟國遙頼天皇護念。更更鳩集得以成邦。方今謹願迎百濟國遣侍天朝王子豐璋將爲國王

とぞ書たりける。又いぬ日の戰に。俘にしたる唐兵一百餘人を縛して。これを船にのせ。達率貴智を使節として。日本國に赴き援軍をぞ乞ひにける。斯れば我朝廷にはこれを聞きて。委細の始末を尋ね問ひ。福信等が表文を受け取り。唐兵の俘をも假に獄に下し。厚く衣服飲食を給せらる。こは百濟に向ひて敵したれども。我國に仇せしにあらねば。必ず苛くなものしそと。帝の勅掟あればなり。斯くて福信等の請に從はれて。援兵を賜るべきや。いかにと評議に及ばれしが。遂に阿曇比羅夫と。大臣鎌足との議論とはなりしなり。この時皇太子は。後に天智天皇と申し奉りし。中大兄と申しゝ皇子にして。聰明敏智萬人にすぐれおはしまし。蘇我蝦夷父子を誅戮し

て朝廷を肅清し。また孝德天皇を補佐し奉りて。制度律令を改め民の租稅を寛くし。豪民の兼併を除き。諸國に軍團を置き。勇士を選み。武備を整へ給ひしかば。國富兵強くして。その勢遠き高麗新羅百濟はさらなり。かの強兵富國をもて。聞えたる唐土まで。これを傳へ聞き。或は親く睹て。懼れおのゝかざる者なかりき。斯る英武の太子におはしましければ。つら〳〵二臣が爭議をきこし召して。竊に天皇に奏し奉りけるは。鎌足の議は。治平の文臣たるべき。穩當の說にて。國を治め民を安くせんとするを。專らとするには。みだりに兵馬を動かすは。宜しからずと思へばなるべし。されども。我國の大敵にして最畏るべきは唐國なり。殊に當時の國主たる李世民と申は非常の英主にて。その父高祖を輔けて。隋國を亡ぼし。四百餘州を擊平げたるものなり。その勢にのり遼東に兵を出し。今まさに三韓をも取らんとす。三韓もし平ぐに於ては。いかでそのまゝ

にして止み候はんや。ます〳〵兵を盛にして。我國に寇せんは必定なり。今に於て。我威武を示して。その鯨鯢の慾をとり拉しがざるほどならば、後に悔ゆとも及びがたからん。百濟を救ふは。これ末なり。我威武を示して彼か覬覦の志を絶つとは。これ本なり。財を費し。兵を損するとありとも。彼が侮を啓き。後に大患を貽すに比ぶれば。九牛が一毛を失ふのみ。阿曇比羅夫が奏議に從がはせ給ひて。直に彼れに大將軍の職を授け。名ある勇士をあまた從へさせ援兵とし。かの鬼室福信等が望み請ふ所にまかせ。質子として。とり置かせ給ひし豐璋をかへし遣はし。かの國人の心を一致せさせ給ふに若く事候はじ。されども海外に軍勢さしつかはさるゝは。これ大事なり。兵器食料充分ならざれば。中道にして疲弊の患なしともいひがたし。こゝをもて。まづ大軍を出さるゝまで。早く然るべき智謀の士を撰み。精兵數千をもて。豐璋を送りつかはし。人心の離散

を繫がせ給ふべし。斯て用意を盡く飭ひて。比羅夫を差し遣はしたまはゞ。悔させ給ふとあるべからずと。事詳かに奏し給ひければ。天皇大にこの議を稱贊まし〳〵。即ち大山下狹井檳榔小山下秦田來津に勅を賜ひ。精兵五千を率ゐしめ。豐璋をもて。百濟王とし、織冠を授け。又多蔣敷が妹は。美人の聞あり。又才德いみじきよし。かねて聞し食されしにぞ。天皇みづから媒せさせ給ひ。これを娶はせられ。百濟王妃としともに本國に。ともなひ赴かしむ。斯くて兵船に兵器糧食數多のせ。築石の津を出帆す。その時。百濟王豐璋に賜はせし詔に。

乞師請救。聞之古昔。扶危繼絶。著自恒典。百濟國窮來歸我。以本邦喪亂靡依靡告。枕戈嘗膽。必存拯救。遠來表啓。志有難奪。可分命將軍。百道俱前。雲會雷動。俱集沙喙。翦其鯨鯢。紓彼倒懸。

狹井の檳榔は。武勇衆に勝れて。能く强弓を挽き。百歩の外に敵を

射て。中らずといふと無し。志慮淺くして。遠き謀を知らず。已が勇に誇りて。敵を輕くするの癖あり。秦の田來津は。武器弓馬は檳榔に及ばざれども。忠義の心厚く。又文學を好みて。南淵先生に學び。經籍に通じ。又孫吳の兵法を脩めたり。常にいへらく。大丈夫君に事へ奉りて一生爲すとも無く。官祿を貪りて。空く歲月を經て牖下に老死するは。身を溝壑に棄るに同じ。いかで外征の事もあれかし。萬里の波濤を胃し百戰の危をかへりみず。我大日本の威を。敵國に耀かし。名を青史に留めんと。斯りしかば。今度の詔下りて。その喜大方ならず。はやくも。武具甲冑の用意して。衆に先ちて。兵部に會し。檳榔といへるに。軍議を定めて。出陣しけり。

再び唐兵を破る　一

新羅王金春秋は百濟の王城にありて。なほ吾國にかへらず。をさを

さ。軍威を張るものから。過ぐる日。福信等の兵と戰ひ。思はぬ敗をとり。顯み切たる唐國の援兵を散々に打破られ。あまたの兵を俘にせられしかば。福信等がなほ亡びざらんには。百濟國全く。我手に入らず。又彼等は。かねて日本國に服屬せしと久しければ。必ず使をもて。かの國の救を求むべきは。必然の勢たり。さあらばこれ。實に大敵なり。とかくに。唐兵を俘にせられたるをもて。將軍蘇定方に告げてその救を求むべしとて。速に使者を遼東に發して申しけるは。日本は百濟を救ふのみならず。實はこの心唐國に寇するに在り。聞が如き。鬼室福信等。大國の兵卒を俘にし。使といへるに。日本國に獻ぜしに。日本國。その俘を虐使して。これを孥とし辱めを加へたりと。堂々たる。唐虜三代の統を承け繼ぎ給ふ中國にして。東方一島國の爲に。その軍兵を辱められるゝは。いかにぞや。早く新羅に援軍を給はりて。かの國の兵が。いまだ渡海せざる先に。逆寄

にその罪を問ひ給はんと。今日の急務なり。若し請の如くゆるさせ給はんには新羅全國の力を擧げて、先鋒をうけ給はる可しとありけるにぞ。蘇定方はこの書を得て。大に驚き。こは忌々しき大事なり。新羅百濟高麗の國々。一万一日本國に降伏せば。遼東の地は吾有に非ず。はやく救を遣はさゝれば。急報を長安に奉りて。ひたすら援軍の催促に及びけり。金春秋は一面には唐國に向ひて。救軍を求め。又一面には間者を遣はして。日本國の援兵到着せしやと伺はするになほ聞とゞかず。その沙汰無し。唯鬼室の福信兄弟は。任射岐山の要害を堅固に守り。又餘自信も久麻喜怒城に楯籠りて。唯防禦の用意に暇なく。寄來ぬべき躰も無し。間者はそこゝに潜み匿くれて動靜を尋ぬ聞きしに日本國より遣り來れる商人にやと見ゆるものありければ。竊にかの地の居動を尋ね聞くに。かの商人對て言けるは。さればその事なり。

彼等かの國の都にありて援兵の渡海を今か今かと頸を延ばして朝議を伺ふに。朝廷の大臣その議兩派に分かれ。救ひ給ふ可しといふもあり。又外國相爭ふは。これ常の事なり。我に於て何の利害やあるべき。空しく兵糧器械を費して。國の富を減じさせ給ふは。利益に非ずといふもあり。久く決せず。されば渡海いつ頃にや。定まり難しときゝたれば。大に望を失ひて、歸國したるなり。斯くては忠臣と聞えたる鬼室ぬし。又餘公などもさこそ本意無くおはすめれ。わぬしも。この國の同じ人民と見ゆるにぞ。いかに憂はしき事ならずやと。眉を蹙めて物語るにぞ。さては日本國の援軍容易に渡海せずと覺えたり。さればこそ。鬼室等の勢も始に似ず。唯籠城に餘念なく。打て出づる勢も見えざるなれ。こは好き消息をきゝつるよと。件の間者は。いそぎ走りかへりて。よしを新羅王に告げしかば。金春秋は大に喜び唐國の大兵をまちて日本の援軍を破らんと謀りしか

ど。今は唐兵を待つに及ばず。いで我新羅の一手をもて。かの殘黨等を皆殺にすべし。さすれば。唐國の力を借らず。兵權を奪はゝのおそれも無く。この國全く我手に歸すべし。若唐兵を助として。殘黨等を打ち掃ふとも。大國の救によりて。利あるときは。土地を割きて。獻ずるか。又は全國の租稅金帛を盡して。その恩に報ひずば有べからず。これ損ずる所多くして。利すると甚寡なし。さらばすみやかに。任射岐久麻喜怒の兩城を一戰に陷潰して。兩將の首を獲るときは。百濟一時に平均せんよ。掌の物を觀るが如しと。打のこされたる唐兵をとりめて。百濟の王城を守らせ。腹心股肱と頼みたる大將朴雲英といふものに。一千五百の雄兵を率あて。福信が任那岐山の城を攻め。雲英には久麻喜怒城に向はしむ。

さても恩率鬼室福信は貴知が報を得て。日本の援兵來れると知るも

のから。竊に城下の者どもに命じて。斬るべしと。嚴く號令し。王子豊璋を始めとして。日本救援の大將狹井檳榔秦田來津等が。本國に着するとそのまゝ。こゝかしこの山中に深く忍ばせ。竊に合戰の計議を定めしかど。かねて號令せしをもて。その機密を知るものは。福信集斯餘自信の外。使者にたちし貴知のみありて。城中の兵士といへども。唯日本の援兵遲しとうちつぶやきて。援軍はやく到着して。軍謀を運らすとは。夢にもこれを知らざりけり。

新羅王金春秋はかくとも知らず。日本の兵いまだ來らざる前にはやく百濟の殘黨を打破りて。福信が任射岐山に押寄せ喊を咄と揚げ。無二無三に攻寄るに。城中の兵は。かねて期したるとなれば。些も恐れず。箭を飛し。石を擲げ掛け。隙間も無く防ぐほどに。新羅の兵勢猛しといへども。初の思ひしには似

ず。人楯のかげに隱れて。進みて大にいらち。いかに福信力を竭して防ぐとも。國王すでに擒にして我國に在り。かばかりの殘黨のいかほどの事やはある。もし一時に揉み潰すと能はざれば。餘の城をはいかにすべき。進めやものども。と。馬の鞍輪を打敵き。聲苛高く呼はりければ。新羅の兵これに氣を得て。物勢ひとしく盛りかへし。兵心は少しもひるまねども。外に援けの兵無ければ。今はもち悚へぬべくぞ見えたりける。この時城中には福信の妾桃葉主のほとりに居たりしが。かくと聞き。敵兵強くして。味方危しと見え侍り。斯てはしまさむより。斬て出て戰はせ給へかし若敵兵勢猛にして。味方敗北し。君の打死させ給はゝ。妾も同じく。こゝに自殺して。泉下に仕へ奉るべしと。泣〳〵申ければ。福信から〳〵と打笑ひ。心弱き事をいふ女子かな。見よ〳〵今に敵勢陣中よりうら崩れして。

退きなん。何條騷ぐとかは。と驚く。氣色無りけり。斯る所に。新羅の大將雲英の率ゐたる軍勢五百餘騎。久麻喜怒城に向ひしもの。かの地の合戰利を失ひて。春秋が陣に向ひて。あはてふためきて逃れ來にけり。春秋大に驚き。かの城は。要害此地に及ばず。又城將の餘自信も。武器は福信に劣れり。いかにして。敗走せしぞと。雲英が命からく〳〵殘卒を率ひて走り來るを迎へ入れて。尋ぬるに。雲英は。あゝぎく〳〵。されば候。某王命を承りて。久麻喜怒城に向ひしに。かの地は淺間にして。要害なく。防禦の躰もいと疎なれば。唯一戰に蹈潰さんとはやりしに。敵には城外の森のうちに伏兵あり。忽横合より大浪の寄來る如く。押寄りぬ。それさへあるに思ひも懸ぬ日本勢眞先にすゝみて。かのをそろしき大弓大箭を雨の如く射懸らるゝに。我軍に頼み切たる猛卒兩三人忽ちに射殺されて。屍を陣中にさらしたり。我軍はこれに驚きて。城攻は餘所になりて。件の

伏兵に破られじと。此を先途と戰ひしに。城中よりは。これをみて。かねて謀りしことにやありけん。城將餘自信精兵を率ひて。疾風の如く打て出で。味方が只今日本勢と戰ひたる左の方より稍を舞し刀を揮て斫て入る。味方勇無きにあらねども。左右の敵に當りかね。思はず全軍崩れしかば。日本勢はます〳〵勇み。大太刀を揮り閃かしてきり立られ。味方これが爲に兩段となるもの。幾人といふことを知らず。五百餘騎の兵。大半は皆うたれて。某わづかの手勢を率ひてのがれ來てこそ候へ。早く御用心候はずば。ゆゝしき大事に及べしと息つぎあへず物語れば。春秋大に驚き。いかに日本勢が渡海してありつるとか。さあらんには。これ容易ならぬ戰なり。こゝにうかうか守り居らば敵忽ち背後より襲來て。前後より挾み擊たれん。早くこの城の圍を解きて。王城に楯籠り。要害堅固に防ぎ守らば。唐國の大兵援け來りて。一時に日本勢を打破らんこと。掌のうちに在り。

さらば引かへせと軍中に下知し。本城の圍みをとかせ。軍勢を引揚るに春秋が武畧に富みて。智計あるものなれば。城將がこの機にのりて。打て出でなば戰難儀に及べしとて。雲英に命じ。その手の勢をもて。城に向はしめ。ます〳〵新手をもて攻めかゝる躰にもてなし。己はまづ一千餘騎を率ゐて。王城指して引かへす。城兵はかくとみて。新羅王が俄に圍を解きて引還せしは。故あるべし。はやく城中より打て出で。まづ新手と見せたる押の兵をきり散すべしとすむれども。福信はちとも騷がず。吾すでに日本勢と約せし事あれば。すこしも急ぐ事無れと例の騷ぐ色なければ。兵士等いと心元無く思へども。主將の命に違ふよしなく。其儘にしてもだしけり。時はこれ齊明天皇の六年十二月の二日の事なりける。新羅王金春秋は。百濟の王城に馳せかへり。堅く防禦の手を盡さんともみにもふで軍勢を驅り立て。やゝ城のほとりに至るに。城中より出で迎むと

もせず。寂として音も無し。こはいかに城中には。吾國のものとものみならず。唐國の雄兵等まで。とゝめ置きしに。吾が留守させしを。よき暇を得しと思ひて。上下うち叩きて。開けさせよと。いら立ければ。先手の兵卒。城門に進み。やよ留守の人々。吾王のかへらせ給ふに。何とて出迎へざる。疾々門を開き候へと。聲高やかに罵りしにいかにしけん。城兵は門を開かず。櫓の上より立あらはれたるものあり。とみれば。これ唐の裝束に非ず。又新羅の甲冑にもあらず。まさしく日本の兵士と見えて。黒革に紺糸をもて繊したる鎧を透間も無く着下し赤銅の前立したる黒金の兜を戴きたるが。新羅の國語に通じたりけん。只今門を啟きゐたる兵士には。見向きもやらず。遙に馬を立たる新羅王に向ひ。やあれ新羅の金春秋汝無道の慾を縱まゝにして。百濟王を殺し。あまつさへ。我天朝の兵に向ひて。箭を放ち刃を交ゆるこそ。

不敵なれ。百濟國は我日本の屬國にして。その王城は。我郡國にも異ならず。さるを己が兇威にまかして。横領する條これ反逆の賊に同じ。こゝをもて。吾天皇吾主將なる狹井の連秦の造等に詔を下し給ひて。百濟の忠臣鬼室福信餘自信を援はせ給ひ。汝が出陣の盧に乘じ。すでにこの王城を恢復せり。城中に籠り居たる。新羅の兵卒はさらなり。唐國の殘卒等まで。盡くこれを擒にして。獄に下したるぞ。はや兜を脱ぎて。吾兩將の旗下に降參せよ。さらずば盡く誅戮して。首を天皇に奉るべしと呼はりければ。新羅王は大に慌れしかど。士卒の思はん程を耻ぢて。大に怒り。あゝ。日本の兵士何の懼るゝ所かあらん。さまでに百濟國を助けむとならば。吾國と戰を交へざる先に。はやく援兵を出してこれを救ふ可きに。さはあらずして。吾國がこれを滅すに及びてのち。表に援兵と稱してその王城を奪ふは。これ百濟を援ふにはあらずして。その機に乘じて。

を奪はんとするなり。名を義兵に借りて。貪慾を縦まゝにせんとするに非ずや。吾國はこれもと百濟高麗ともに獨立の王國たり。百濟みだりに日本に服して。その屬國となるは。これ獨立の義を失ひて。恥を全國に貽すものなり。これを滅して幷せ領し。日本にも從がはず。又唐國にも服從せず。我新羅國の威を東西に輝かさんとするのみ。登汝等鼠輩の知る所ならんや。今は無益の言戰せんより。いで一戰にこの王城をとりかへさんと。息捲て。士卒に下知し。攻かゝらんとしたりし處に。かの裨將雲英は手勢を率ゐて馳來り。春秋が只今城を攻めむとするを見て。大に驚き。馬より飛び下り。さゝやきけるは。大王いかにぞ。斯くは志慮ましまさぬぞ。日本の軍勢すでにこゝかしこに充滿し。これに加ふるに。百濟の遺民等これに應し。我軍の歸路を絕んとす。この城を攻めさせ給ふとも。いかで容易に落つ可きや。一先本國にかへり。唐國の援兵の至るをまち。大

擧し給ふにしくとあらじと諫めしかば。春秋もとより。戰ふ心あるにあらねば。一議に及ばず。汝の諫その理あり。さらば汝は殿軍となりて。あとよりつゞき候へ。我は諸軍を率ゐて。本國にかへるべしとて。雲英をのこして。その身は諸軍とともに。辛らく本城へぞかへりける。

さても狹井の檳榔秦の田來津は鬼室の福信餘自信等と謀を合せて。兵を兩手に分ち。檳榔は餘自信か久麻喜怒城に在りて。敵兵の不意を擊べく。田來津は直に銳兵を率ゐて。百濟の本城をとりかへすべしと定め。金春秋等が。出陣するとみて。忽ちに押し寄せしに。留守の兵は。新羅の老卒と。討ちもらされたる唐國の殘兵のみ。多くは創を蒙りて伏したるものゝみ。手にたつ兵卒わつかなりければ。唯一戰に打勝て敵兵數多擄にし。王城をは取りしなり。春秋が立かへりしとき。兵卒等は打て出で。春秋を擊ち取るべしといふものあ

りしかど。田來津はこれをおしとゞめり。春秋は敵ながら。武略に富める可らず且つ我勢少く。今俄にこれを擊つと然る可らす。守るべくして戰ふ可らす。春秋雨城を得ずしてかへりしかど。その手の勇卒いまだ多く死せず。吾寡兵をもてこれと戰ふとも。勝敗いまだ知るべからず。今ゆるしかへすとも。本國の援兵盡く到着しなば。これを擊取らんは易かりなんと。討て出るとも無りしかば。春秋は虎口をのがれて。本國指して引きかへす。雲英も城中より追縋らば一戰すべしと思ひしかど。幸にして討て出ねば。やすく〳〵と主に從ひてそ。命をのがれける。

されはこの時唐國に太宗世民崩して。國中の政事は。すべてその皇后武氏に在り武氏は聞ゆる美人にして。且その性果敢なるのみならずをもて賞罰を嚴にし人材を擧げ用ひ。政治刑法の事はさらなり。武略に富（高宗と諡す）暗昧にし

備兵馬の事といへども。心を用ひさる事無りしかば。遼東よりして。將軍蘇定方が新羅王に百濟國を滅し日本と疆端を。開くよしを聞き。大に喜び。三韓の地は。中國と地を接して。その風俗もやゝ似たり。これ同文一治の政を行ふべし。まかるに歷代これを獨立せしめたるは。その時王が儒弱の致す所にして。笑ふに堪へたり。新羅が百濟を滅せしこそ幸なれ。此虛に乘りて三韓を平均して。中國の化に歸せしむべし。それのみならず。日本海外に在りて。久しく頽強にして。中國に服從せず。屢使節往來すれども對應の禮をもてこれを遇し。いまだ臣屬の列に比するとなし。されはまづ。新羅を救ふと稱して大兵を發し。日本と戰ひ。これを敗らば。三韓はいふに及ばず。日本國もこれが爲に辟易して。臣と稱して朝貢せんと疑無し。あはよくは。日本を討ち平げて。中國の內地に比するに及ばゝ。漢魏六朝はさらにもいはず。唐虞の代といふとも。いかで我に勝るとあら

んと。いとおそろしくも。思ひ慮りしかば。唐帝はすゝめ申して。三十萬の軍兵を發し。劉仁願といへる名將を選み。新羅を救はしめらる。この比狄仁傑といへる名臣あり。忠直にして思慮深きものなりければ。これをきゝ。進み出て諫めけるは。新羅一小醜にして。その存亡敢て我大兵を煩すに足らず。みだりに兵を起し。糧を費すは。これ中國を疲弊し。無益の地を得んと欲し給ふか故に覺えて倭。漢の武帝隋の煬帝が禍を思召しまらせ給はずや。日本は小國といへども。その武畧富強は。實にあなどりがたきものなり。隋のとき。日出處の天子と自ら號し。隋國を指し日沒處の天子として。慢罵したれども。煬帝の勢をもてすら。これを如何ともすること能はざりき。萬一我大國の兵彼の小國の爲に破らるゝ事あらば。三韓遂に我を侮りて。世に恥辱を貽す事あらん。よく〳〵御思案あらまほしく倭へと。詞を盡して諫めけれども。皇帝はすでに武后の言を納れて。勅

命はや下りにければ。汝の言も理無きにあらねど。臾さきに皇后の請に從ひしうへは。今さらに改むべからずと。これを聽ず。こは利害を知らざるにはあらねども。帝は皇后の威に怯ぢ給ひて。その言に違はゞ怒りのゝしられんと。こゝに百濟の福信餘自信等は。新羅王を京城に追落し。唐國の兵士等を數多擄にして。日本の諸將と謀りし如く。只一戰に本國を一定めて。百濟王の位につけ。多の蔣敷の妹をもて。王妃の位に陞せ。福信餘自信を左右の佐平とし。國政を行ふほどに。人民先王が苛き政の爲に困窮し。叛くもの多かりしかど。こたび日本の援兵をもて國を恢復し。かねて人望ありし鬼室福信が佐平の職に即きしときゝしかば。皆喜曜して千歳と唱へけり。しかるに恩率執得は。豐璋に從ひて。久しく日本に在りしかど。その性姦

邪にして唯諂阿をもて豐璋が寵を得るのみ。こたびの合戰に。一もその功無く。あまつさへ。王城を恢復せしとき。まづ財物を私して。己が家に移し。又竊に民間より美女を奪ひて。家に養ひ。これを王子に奉りてその歡心を買しなど。よからぬ振舞多く。さらぬも。かれが本國に在りしとき。福信が妾桃葉を奪ひ。王子が慾を遂げさせんとせしとは。世の知る所なれば。福信はその心寛大にして。さしも怨とはせざりしかど。餘自信は深くこれを悪み。執得は所謂獅子心中の蟲なり。これを除かざれば百濟國一旦恢復したりとも。恐は長く保ちがたかるべしとて。福信に說きて。はやく吾王にすゝめて。彼奴を退け給へといひしかど。福信はこれを聽かず。君の說は正理にして。狂やべからねども。今日はこれ中興の初めなり。執得は姦邪の人となれども。久しく王子に從て日本に在りて。その人心を得たり。且いまだその悪事を人多く知らず。唯吾妾を奪はんとしたるは。

その實あれども。今この人を罪するときは。福信が勢を得て。私の怨を霽らせしなど。事實を得知らぬものは。必ず言はん。されば人心動搖して。恢復の功これより破れんも知る可からず。暫く忍びて。禍亂の平ぎし後をまちて。徐にその罪を議するとも。遲にあらずとありしかば。餘自信はいひがひなしと。思へども。福信が私怨を思はず。心を兢ると公平なるに感じて。これを強ゆるに忍びず。そのまゝに止みしかど。なほいかにもして。この姦人を去らばやと。或る日王豐璋と政事をものがたるの次に。それとは無く。忠臣を近けて。佞臣を遠け給へと諷諫せしに。豐璋王は執得が己が心を知りて。媚び諂ふを喜び。餘自信が言を。かへりて寵を妬み人を讒するかと疑ひ。はか〴〵しくも答へざりしかば。餘自信退きて。歎息し。新羅を滅ぼして。福亂を平ぐるは易く。姦臣を除きて國家を治むるはかたしとつぶやきしとぞ。

王城再び奪はる　帝朝倉に崩ず

さても。唐の大將劉仁願は三十萬の大兵を引て。遼東に至り。蘇定方と會し。商議すらく。日本百濟と力を合して。王城をとりかへし。新羅王が一旦奪ひたるも。そのかひなく。本國にかへりたるよし。聞きたるが。百濟は殘破の餘。兵糧に乏しく。恐くは。久く日本の兵を養ひがたかるべし。日本强といへども海路に兵糧を運輸せんと。これ一朝一夕に辨す可くもあらず。さらば援を爲すは。高麗なり。よて今仁願は兵を引て百濟に向ふべし。定方はこれと一時に。高麗をうつべし。さするときは。兵糧運送の路絶えて。日本勢いかに弓箭長劍に勇を奮ふとも。忽勢挫け戰はずして。王城をとりかへしつべしとて。兩將ひとしく各も〳〵。その部將等に下知を傳へて出軍の用意しけり。

秦田來津狹井檳榔等は王城外に屯して。兵馬を訓練し。王豐璋佐平鬼室福信餘自信等は王宮に入りて。圖籍を閲みし。錢糧を算へけるに。先王義慈が驕奢の爲に。府庫の金寶を多く失ひしうへに。新羅の爲に掠め奪はれて。餘すところ幾許もなし。これに加ふるに。兵燹の後。人民窮困して賦稅聚まらず。日本の軍士を養ふにもその費足らず。海上の風波ありければ。日本よりも。運輸の米穀いまだ到着せざるにぞ。唯日に高麗の救援をまつのみ。上下眉を顰めて。いかゞはせんと評議いまだまち〳〵なりけるところに。はや劉仁願の大兵近きぬと注進櫛の齒を挽が如し。豐璋等は大に驚き日本の援兵をもて。新羅王をひとたび追落したれども。糧食乏しく。人馬疲れ。いかにして唐國の大兵に敵すべき。空しく城を守りて。戰死せんより。一まづその鋭を避けて。後擧を圖るにしくとあらじと。このよしを秦田來津に告ぐ。田來津これをきゝて喜ばず。我等いやしくも

詔命を奉じこゝに渡海せしうへは。國事に死するはもとより覺悟の事なり。大兵をきゝ怯ぢして。逃れなば。何をもて日本はかへりて。面を向くべき。兵の勝敗はその多寡による可からず。城を枕にして戰死するか。一つに一の命なり。なぞて一歩も退く可きとのゝしりしに。狹井の檳榔はこれを諫め。鬼室の福信は智謀の士なり必ずよき謀あらん召びてそのいふよしをきく可しとありければ。即福信を召してその策を問ふ。福信答て。秦將軍の仰その理あれども。唯今城中兵糧ともしく十日の蓄なし。志かのみならず。王城の地は平坦にして。地理よろしからず。四面に敵を受くるときは。防戰實に容易からず。福信が城なる任射岐山餘自信が久麻喜怒城は要害よろしく。又數月の兵糧あり。一たび得たる王城を。とらるゝは耻辱に似たれども。一進一退唯利のある所に從ふこと得策なれ。扞げてこの議に從がはせ給へと答しかば。然すがには

やりし田來津もその策に折れて。諸軍をまとめ田來津王豐璋は任射岐山に入り。檳榔集斯等は餘自信とゝもに。久麻喜怒城に歸り。兩城ともに山壑の險阻に據り。敵の來る路には。大石大木をもてこれを塞ぎ。大軍といふとも。たやすく攻寄するとを得ざるやうに搆へ。鋭を磨き。戰を礪ぎ。唐兵來らば誘きよせ。徹塵になさんと待ちたりけり。

さればまた。我日本にては。帝(齊明天皇)百濟の事を心もとなからせ給ひ。難波の宮に御幸あり。明る年をもて築紫に出ましまして。遙に方畧を授け給はんと。駿河國に勅して。大船を造らせ。明れば七年正月舟師を率ゐて。御舩出ゐり。同き五月朝倉の行宮につき給ひぬ。この時百濟王豐璋佐平福信等將軍秦の田來津等が上表到着し唐國の大兵。遼東を發し高麗百濟の兩國に向ふよしを注進しけり帝表文を御覽あり。少しも驚かせ給はず。皇太子(天智天皇)を御前

に召し。表文を示させ給ひ。朕百濟を救はんとするは。これ亡國を繼ぎ。絕世を興すの義擧に出たり。まかるに。唐國ば昔より。仁義の道を唱へながら。反て新羅をたすけて。百濟高麗を擊んとす。二國何等の罪かある。無道の甚しきものといひつべし。まかのみならず。三韓ならび立てこそ。大國には服從したりしなれ。もしかの金春秋が兇威をもて。これを一統したらんには。いかで唐國に屬すべき。必ず謀叛の旗を翻がへして。獨立せんと明かなり。これ決して唐國の利にあらず。朕唐國を敵として戰ふとを欲せずといへども。彼暴威を逞くして。鴟張の欲を縱まゝにせんとならば朕もまた仁義の師を興し。我國の武威を海外に示すべしと仰ければ。皇太子は英武の性質におはしませば。異議なく勅諚に從ひ。大華下阿曇の比羅夫に大錦中を授け。小華下河邊百枝大華下阿部比羅夫大山上物部熊守大石等をこれに屬せしめられ。精兵十萬を發しかの

地に遣はさる。

こゝに大紫內臣中臣鎌子は百濟を救はせ給ふは。我國の利に非ずと諫め申しゝかど。用させ給はざれば。いかにもして。この議をとゞめ奉らばやと謀りしに。帝はすでに築紫に御幸なりて。皇太子も供奉せさせ給ひ。都には大臣諸皇子留守の任をうけ給はり。朝廷無事にして。海內ます〳〵治平なれば。心にかゝる事は無れども。萬一海外の合戰利なきに於ては。唐國との親睦を破り。軍馬の騷亂止む時なく府庫空乏して人民疲弊せんと鏡にかけて見るが如し。帝は雄大の氣象おはしまして。神功皇后に似させ給ひ。一時に威名を三韓にあらはし。又唐國をも征服せんとの志ましませども。御齡もすでにかたむき。常に多病にして。恐くは長く此世に在しますまじとも思はれず。まかるに海外に戰興り。結びて解けざるもあらば。その禍測りがたし。皇太子は英武萬衆に勝り給へども。

謀遠慮ありてみだりに強勇に誇り給ふ君に非ず徒に坐してこゝに物を思はんより筑紫に下りて。諫て見ばやと。大臣等には主上の起居を伺奉る爲に下向すと告げて。夜を日につぎて朝倉の宮に至り。行宮に參謁してみたてまつるに。帝は御病がちにおはしませしに。長途の御疲にや。いとなやましげにましましければ。鎌子は大に驚き御藥の事など。侍臣に就き細やかに尋ね問ひ。醫官にも出で逢ひて。その方劑を推し究めしに。日頃雄々しくおはしませは。都を出させ給ひぬるほどに。はやあつしくましませしを。物ともせさせ給はで。船路を長く經給ひしかば。斯くは重らせ給ひぬと申けり。斯て鎌子は行宮を出で。皇太子の御座所に赴き。己が意見を詳に述しかば。皇太子も。げに卿のいはるゝ所。よく道理にかなへり。我は左は思ぬにあらねども。今日に至りて。これをとゞめんには。我國の弱を示して。新羅の勢を長じ。又唐國の輕侮を招くも測る可からず。さ

らばとて。長く海外に兵を出して。土地を爭ひ。人を殺し。財を糜すは得策にあらず。詮ずる所は。一たび。我と唐兵と鋒を交ゆるに至り。武威を示して。我容易に侮りがたきをしらせんのみ。しかしてのち。輕く兵を引きあげなば。國中を疲らすこも薄く。又唐國にも。我勇鋭に怯ぢて。みだりに軍馬を我に向るこなく。平和長く保つこを得べし。此等の進退は吾かねて卿とゝもに。南淵先生がもとにてきゝたる兵略なり。早く卿に語りて。その意見をきかばやと思ひしかど。帝征討の志鋭どくおはしませば。輕しく異論を生するよし聞し召て。逆鱗あらんも測られずと。勅命に從て。こゝに供奉し。さて比羅夫等をつかはしたるなれ且比羅夫にはじめより。卿と說を同くせず。ひたもの新羅を征伐せんとはやりしものなり。又これに屬する阿部比羅夫河邊百枝等その餘なほ在廷の臣僚その黨與少からず。もしこれを止めんとするときは。必ず爆裂して。內地の騷亂を

引き起さんも知る可からず。志かし。彼等が勇鋭の氣を海外に洩らしもて。唐國窺窬の念を絶たしめ。また比羅夫らに。新羅は小醜といへども。その勢侮りがたく。唐國の兵もまた俄にこれを破り難を知らしめなんには。比羅夫もとより智勇ありて。兵事にも長けたれば。或は悟るよしあらん。これ一擧して外は海外に我武威を知らしむべく。國内の騒亂を未萠に防ぐべし。卿はいかに思へるかと。げに天性敏智の皇太子が思慮深くましますと。大海もなほ淺かるべし。鎌子はこれをうけ給はりて感服し。臣思慮淺くしてかゝる利害に踈くよしなき諫を上りしこそいと畏けれ。さるにても主上の御病重らせ給ひぬること甚危ふし。はやく還幸なしまゐらせずは。ゆゝしき御大事に至りやせん。この義いかにと問ひ申せば。皇太子うなづかせ給ひ。我も去る日より。しばく諫め申しゝかど。用ゐさせ給はず。死生は命あり。こゝに在りとも。またみやこにかへりたりとも。

免かるべからず。但し我朝古より國王みづから軍に將たる事は。これ武をもて國を建たる所以にして神やまと磐吾彦のすべらきよりこのかた。代々の帝皆さらぬは無し。朕獨り安逸を好みて。かばかりのいたづきに。海外の勝敗いまだ定かならぬを。かろ〳〵しく還らんやと。勅錠ありしうへは。我こゝに在りて。御給ふとも。我力には及びがたし。万一世を去らせて。内の事を治めんに。天下の事何ぞ慮るに足らんやとありしかば。御後の事を謀らひ。御身みやこに在り鎌子は太子の大略にます〳〵感激し。幾日もあらで。みやこにかへり。何氣なく。行在無事のよしを。諸大臣に告げて。己が職事を治むるのみ。また言ふ事も無りけりさても劉仁願は船師を率ゐて。邊東より直に百濟の王城に攻めよせて。唯一戰に攻破らんとすゝみしに。測らずも。王城nはや空虛にして。敵一人も居らず。土人を捕らへてこれを問ふに。佐平禰信が

計畧にて。一度とりかへせしを。再びまた盡く兵を退けて己が城々に楯籠りぬといふ。さらば。その城を攻め落せと進軍の用意し。いづれも要害堅固にしづ間課をもて。兩城の形勢を窺はしむるに。遽にこれを攻むとせば。反て人て容易に攻め落さるべくもあらず。馬を損すべし。すでに新羅の大軍南城に向ひしとき脆くも打破られしは。金春秋の勇足らざるにあらねどもにによろしからねばなり。蘇將軍高麗に向はせ給はゞ。かの國より援兵を出すと能はず。又糧食さへ送らざるほどならば。彼自ら饑つかれて。戰はずして降服すべし。いそぎ給ふに及ぶべからずといひしかば。さらばまづ軍馬を休めて。鋭氣を養ひ。まかしてのち日本勢を破るべしと。王城を攻めとりたるよし。新羅王のもとに告げやり。しばらく攻城の用意を罷め。蘇定方の消息を待ちにけり。百濟王豐璋は圖らずも。庶子をもて。國氣によりて。王位に即く事

を得たりければ本國喪亂の餘とはいへども。遺臣遺民なほ依然として。もとのまゝなるにぞ。その喜大方ならず。初のほどは。節儉を守り。身の行を愼み。福信餘自信等の賢輔を敬愛し。政事を盡く。この兩臣に委ぬ。又宮中の事は。多氏王妃にまかして。專ら驕奢を禁じ。衣服飲食に至るまで。先王の遺器といへども。その華麗なるものを用ひず。左右の侍女等も。數人に過ぎざりければ。福信等大にその過を改むるを喜びけるに。王城を出でゝ任射岐山に入りしより。舊態やうやく舊に服し。恩率執得が言を容れず。城中に殿閣を築き臺榭を作らしむ。福信これを諫むるといへども。これをきかず唐兵王城をとりてのち。久しくこゝに攻寄するともなかりければ。豐璋はます〳〵驕りて。遂に避城といふ地の別宮に執得がかねて窺ひ日本の將軍秦の田木津には。要害の地を巡視するよしを。僞り唱へて。數日避城に逗留して。任射

岐城にかへらず。田來津はこれを知るといへども。かねて勅諚あり
て。軍旅の事は少しもゆるび無く。百濟の王等と議すべしといへど
も。その國政に與るべからず。朕の擧は義兵なり。もし我將軍にか
の國政にあづからしむるときは。これ亂に乘じて。これを奪はんと
するの嫌をまぬかれがたしと。おきてさせ給ひしかば。王が道なら
ぬ行あるをみて。いと苦〳〵しく思ふのみ。一言もこれを論ぜず。
獨福信は憂懼に堪へず。書を久麻喜怒城におくりて。餘自信にも告
しらせ。ともに諫めんとせしかど。自信は防禦の備に暇なく。たや
すく城を出べくもあらず。唯福信と連署して諫書を上るに過きず。
王が放蕩はさらにやまず。王妃多氏は賢明の聞あり。容貌美ならざ
れども。その性端肅にして。文學を好み。又雄々しくして。温厚の
德を備へたり。王が初に似ざる行あるをみて。大に憂へ。しば〳〵
これを諫むるといへども。王は表に過を改むべきよしを答て。さら

に改むるの色なし。避城といふ地は下濕にして。要害よからねども。
聖明王の時。城を築き金銀珠玉をつらねたる宮殿あり。又財寶珍器
を多く府庫のうちに藏めたれば。王は執得その餘の幸臣等を從へて。
日毎に淫樂を事とせり。ある日福信は王の本城に還り來ます時をう
かゞひ。進み出て申しけるは。唐兵圍城に入りて。久しけれども。
いまだ攻擊のことに及ばざるは。必定謀計ありと覺えたり。我より進
みて。戰はんとすれども。兵少く糧乏しければ。その事に及ばず。
されど。日ならず日本より大軍到着するよしなれば。その時こそ我
百濟の君臣がすゝみて。戰を致すべけれ。されど此任射岐山は分内
狹くして。援軍を屯すべきの餘地なし。州柔の城は。當時守りの兵
のみにて。城將あらざれども。百濟第一の名城にて。要害他所の及
ぶ可きに非ず。かの地に移らせ給はゞ。恢復の軍畧を施すに便宜に
候はんとありしかど。王は避城の地を慕ひて。なまいらへして從ふ

氣色も見えさりけり。

多王妃は王が諫めを用ひ給はざるをもて。憂懼に堪へ給はず。いかにもして志を改め。恢復の計を議せさせ給はんと思ふに。唯たのむべきは。佐平福信なり。秦將軍は勅諚の趣重ければ。國政に預らず。鬼室佐平と謀らせ給はゞ。然るべからんと。日本發途の時にも言しぞかし。されば佐平が意見をきかばやと。女官をもて。佐平を宮中に召して。その論ずることを聞かれたり。王妃は日本にありて。人臣の子なれども。すでに我帝の詔をもて。王妃の位に即かせ給へは。翠帔寶冠羅綾錦綺の服。きらやかにして。唯莊麗のみならず。自ら一國の母たる威儼をも備へたり。翠帷を掲げさせ。金漆の椅子によりて。福信は身近く召す。福信は佐平の職なれば。これ我朝にて。大臣の任たり。又武官をも兼たれば。頭には襆頭を戴き。金の簪を加へ。身に紫色の袍を着し。玉帶を佩び。腰には。寶劍を帶びたり。

即先王がかつて賜はりし所なれば。宮中といへども。脱するよ無きは。特恩と知られたり。王妃はすでに。百濟の言語にも。通じ給へば。こは鬼室佐平にておはせしか。始て當國に來りしとき。吾王とともに對面せしのみ。そのゝち軍國多端のおりなりければ。ゆる〳〵物語をきゝし事なし。先王の御事申も。かしこき事ながら。驕奢に耽らせ給ひしかば。かゝる大難に及ばせ給へり。今吾王殿下之を戒として。初の御ほどは。愼みおはしましけるに。いかなるゆゑにや。近頃の御振舞。申すも憚ある事ながら。ほと〳〵先王の御所行に似させ給へりと覺ゆ。わらはこれを諫め奉るといへども。用ひ給はず。佐平は社稷の臣と上下たのもしく覺えたるに。これを救ふ術おはさぬかとありしかば。福信はおもふにましたる。王妃の賢明にあきるゝまでに感佩し。傳へきく。周の宣王の后姜氏と申せしは。賢德ありて。宣王の政事に惰らせ給ふを。諫めしとうけ給はる。それにも

ましたる御心ばせかな。然すがに君子の國と聞えたる大日本國に生れ給ひしゆゑにこそ。おそれながら。福信が如きものゝ及ぶ可きに侯はず。かくまで賢明なる王妃ましますに。素性も知れぬ賤しき女子に迷はせ給ふ事のあさましさよ。福信わが王の御爲に竊に謀らふ旨あり。これひとかたならぬ機事にして。容易に洩らす可きに侯はねども。申あげ試み侯はんとて。側に侍る女官等を遠けて。竊に上啓に及びけり。斯てのち屢〻王宮にまゐのぼりて。密議する事ありしかど。王は常に王宮にましまさず。避城にのみ遊宴し給ひしかば。福信の妾桃葉は新羅の兵が圍を解きて去りしより。主の智計に感じ絶てこれをば知らざりけり。

てます〳〵禮儀を厚くし奉公怠ると無りしが。國王夫妻がこの城に來りしより。をりふし召されて宮中に入りしかど。去る年。王がいまだ王子たりしとき。戲れよられし事は色にも出さず禮容正しくか

りにも笑語をもらしゝ事無し。王妃はかゝる事ありとは思らねど桃葉が日本の語に通じ。かねて和歌をよくするをもて貳無きものに思ひ。暇あるときは。宮中に召して詞がたきにせられけり。しかるに王妃の御許に至り。密議に時を移すことときゝ。いといぶかしく思へども。さりとて。我主は忠義の志厚く。智勇逞ましきすぐれ人なり。又王妃も賢明の聞えありて。日本の帝ことさらに降し賜はらせたる賢女なり。決して過あるべしとも思はへず。唯おそるべきは嫉疑の毀なり。萬一さかしら人などありて。粧しきうはさを。立てられんには。いかなる禍起らんも測りがたし。諫申して見ばやと思ひしが。又よくおもへば我は正妻にもあらぬ身の。賢しがほに。さる事をいひ出んも。おこがまし。まして妬心をもて。さらぬ事を思ひ僻めていひしなど。思はれ奉らんも。いと畏しと。いろ〳〵に思ひみだれしかど。君の御爲にあしと知りつゝ。

わが身を思ふて申さゝらんは。忠ならずと思ひ定めて。福信が或日宮中より出て。己が館にかへり來りしをみて。竊に申す可き事ありと。側の人を追やり。やがていはんとしつゝ。口籠りしが。やゝありて。君しばゝ〳〵王宮に往き來させ給ふは。やむと無き公事ぢはしますかあらねど。瓜田の屨とやらん李下の冠とやらん。世にうしろめたくやおぼさゝる。福信は大に驚き桃葉がかほ。つく〳〵とうちまもり。げにいはるれはその道理あり。我わが王の御爲に奇計を運らして御心を改めさせ奉らんと王妃とゝもに。密議をこらせしなり。そこに心のつかざりしは。ともに天地に恥ざる擧動と自ら信じて疑がはざるをもてなりき。まことに汝が言の如く嫌疑の間に讒間入らは。その禍測りがたし。このゝち宮中に往來すべからず。心を安くし候へと答しかば桃葉は胷撫でおろし。かくとうけ給はり侍りては。やうやく心落居たり殿下の御事は。わらはもかねて憂へ思ひしに。君のおぼん謀もて心を改めさせ給はゝ。この上もなき幸ならんといひしかど。その謀は如何なる事ぞとは。尋ねも問ず。こは國の大計は。女子のあづかり知る事ならねば。愼しみあたるなるべし。

豐璋王は。例のごとく。避城の宮中に。牡丹の膝を枕にて。沈睡しておはしゝが。或る日の朝の事なりき。內官壹人あはたゝしく。宮中にまゐり。宮女につきて申しけるは。何事にやらん。日本の兵士あまた。この王宮を指してまゐりて候。甲冑とやらん。弓太刀とやらん。いとおそろしき。むくつけき軍人のおどろ〳〵しき。其面がまちの鬼神のやうなる。大將にもやと高き。その手のものに何やらん言つる聲は聞て候へども。やまと詞の解しやすからねば。何事とも知らず。はや宮門に近きて候と。あへぎ〳〵これをのぶ。王はがばと跳起き。そは容易らぬ大事なり。

日本の大將が我國を取らんとの謀にや。また唐國と謀を合せて。我を虜にせんとにや。いかにすべきと。もとより柔弱にして。思慮に乏しきわかうどなれば。大に驚き慌てたるにぞ。牡丹も色を變じ。こはいかにせん。父母の許にあるならば。解あらひ衣を服糒き飯をたふべたりとも。命とらるゝ事は有るまじきに。なまじいに。殿下の寵を蒙むりしかば。人の妬にやよりにけん。かゝる枉罪にあふ事よと泣き騒ぐと限りなし。王はあわてたる聲を振ひ起し執得やある。恩率やある。いそぎ參り候へと叫びけれども。答るものも無し。宮女の驚きさまよふをみて。執得はいかにしつると問へば。宮女は只今日本の兵士にやあらん。恩率を搦めておてゆき候ひにきといふ。さては執得はや虜にせられけり。我もまた免れ難しと牡丹の泣き倒れしをみも返らず。一間を逃れ出んとせしに。喊聲を咄とあげて。日本の兵は宮中の庭までこみ入たり。王は今は逃るゝ道なければ。

おそる〳〵。樓の闕干にすがりて。庭面を見降すに。日本の大將はこれ別人ならず。將軍大華下秦の田來津なり。田來津は。その時聲をあらゝげ。國王殿下御きゝ候へ。田來津吾天皇の詔を受給はりて。百濟依復の功を奏せんとて。この國に來りて。すでに新羅の兵を追散し。今また唐兵と不日に雌雄を決せんとす。然るに殿下逆樂に日夜を明かし。吾天皇の御志を奉體せずりて。數日かへらず。田來津いまは殿下の爲に力を盡す術を知らず。こゝをもて。兵を引て日本に還り。このよしを奏聞し。なほ援兵の渡海をとゝめ奉らんとす。よりて辭別の爲にこゝに來れり。といふ佞臣は百濟の爲に依復の力を盡すべきに。みだりに殿下をすゝめて。飲宴に耽らしむ。これ國賊なり。よて日本に引立てかへりて。その罪を糺すべし。かゝれば。今は百濟の興亡は唯殿下の望む所のまゝのみ。暇申すと呼はりて。馬をめぐらして出んとす。王は

懼れおのゝきて。これを止むるすべもなく。唯死せる人の如く倒れんとして。又起あがり。あれよ〳〵と叫ぶのみ。この時馬を馳せて。表のかたより大將の馬前に近よるものあり。身に百濟の冠服を穿ち。腰に劍を佩びたるが秦將軍しばらく御待候へ。某一言申すことありといひつゝ。馬を降りしをみれば。これ佐平鬼室の福信なり。福信は田來津に向ひ。將軍の仰はさる事なれども。福信いさゝか思ふ事あり。しばらく御馬をとゞめられ。御聽あらんを請ふといふにぞ。佐平はこれこの國の大臣なり。さらば暫く歸國をとゞめて。その說をきくべしと軍勢に下知して。宮門の外に出て田來津は馬を降りて宮中に入るほどに。福信はいそぎ王のほとりに至り。王に冠服をあらためさせ。正廳に椅子を設け。王を安置し。さて田來津を請じ厚く饗應の禮を盡すに。この時あはて騷ぎたる牡丹等を叱り退け內官に命じ酒宴を開き福信自ら起て一杯を王に捧げ。さらに一杯を田來津に

のましめ。さて王に向ひいひけるは。殿下秦將軍の怒らせ給ふをかせ給ひしか。福信等が力を悉して恢復を謀り。日本の天皇に奏して請來らせ給ひしは。是王の知せ給ふとなり。然るに。一時の燕樂に耽りてこゝに及ばせ給ふは何事ぞや。且任射岐城は地形よろしからずとて。こゝに移らせ給ひしか知らず候へども。この地は要害あしく。多の兵を屯し難し。かた〴〵早く御志を改めこゝを去りて。州柔城に移り。妖婦を退け。節儉を事とし。兵卒の氣を振ひ起して。恢復の大計を廻らし給へ。將軍もとより朝命を受給へは。中途にして還らんとは。恐くはその望にてはおはすまじ。福信命に代へても留め申さん。いかで此議に從がはせ給へと諫めければ。王は慚ぢ懼れてかへす詞も無く。佐平よしなに計らひ候へ將軍豐璋が過をゆるし給はゞ。今より軍令に從ひ。州柔に移り申すべしと。涙ながらに請しかば。田來津は面を和らげ。王に向ひ天皇の詔を受け。

殿下を助けて恢復の力を致すのみ。國政にあづかる身ならねば殿下は佐平と。その便宜に從ひて移らせ給ふに異議あらず。殊に州柔の要害は。貴國のうちに就きては。これ無雙の地なり。これを根據として打て出なば。進退ともにその宜を得て唐兵を擊ち破らんと必せり。遠からぬうちに。我國の大兵こゝに到着せばともに兵を進めて殿下の爲に先王の讐を報ずべき時遠からまじ。移住の事。田來津に於て異存なしと答しかば福信大に喜び。さて執らへ給ひし恩率執得は王をそゝのかしまゐらせし罪あれども。誅せられんも重きに過ぐ可し。唯その官爵をとゞめて家に閉居せしむべし又侍妾牡丹はこれ一女子に過ぎず。王を迷はし奉りし罪あれども。王妃よりまげてその罪をゆるし王の御許に事へさせ給へと。かねて福信に仰せられて候へば。この儀は御安易かるべしと申しければ王は喜び面にあらはれ。ほとばかり息を衝にけり。こゝに於て。田來津はとらへし執得

を福信が手に交付し。兵を率ゐて州柔におもむきけり。福信は避城にありし近臣侍妾等執得が近鄉より召し來りしものは皆暇をとらせてその鄉里にかへしやり。宮殿の留守の老內官幾人をのみ留め。王の供奉としかの牡丹一人をゆるしてにうつりしかば。かねて謀り置たりけん。任射岐山の城よりは。王妃を始め近侍の臣その餘。兵士はさらなり。米穀什器軍用の輜重皆悉く馬にのせ。車に積みて。唯一日のほどに州柔に移けり。さて執得は。官爵を剝がれて州柔城の一舍におしこめられしかば。一朝榮華の夢醒めていと腹立しく思へども。命をとられぬを幸にして。しく日をば送りけり。この度の居動は。かねて福信が遙に餘佐平と議し。また王妃と便宜を謀り。さて田來津によしを告げて不意に起りて。好邪を退け王の惑を醒しゝなり。はじめこの計畧をもて田來津に請ひしに。某が職務に非ずといな

みしかど。唯兵威を借奉りて事を成んとするのみ。國政を議し申すにあらずと誂きければ。田來津もその眞心に感じて。その望にまかし。さてこそやす〳〵と奸邪を退けて。州柔には移りしなれ。これ老かしながら。禍信かよく機密を守りて。外にその策を決し。王妃よく人を知りて。善く任じ内に在りて機會に乘ぜしがゆゑとぞ聞えける。

帝は朝倉の宮におはしまして。日夜軍議を凝らさせ給ひ。阿曇の比羅夫等を出しやり給ひしが。なほ高麗は百濟に隣りて。その救援を爲すものなり。唐國必ずまづ高麗を攻めて。その援路を絕ち。老かしこて百濟を一時に滅さんとこそは謀るらめ。比羅夫等のみにては。その勢足らず。全勝なほ心もとなし。いかにすべきと皇太子に謀らせ給ひしかば。皇太子も。げに勅諚の趣理ある御事なり。上毛野稚子間人大蓋等。今供奉として。行在に警衞せり。この兩人は兵事に長

し膽略あり。外國の地理をもよく知りたるものなれば。將軍の職を授け賜はり高麗を救はせ候はんはいかにと奏し給ひければ。さらばとて。俄に三万五千の兵を稚子大蓋に授け給はり。巨勢神前譯語三輪等をこれに屬せしめ。兵船一百餘艘にのりて比羅夫につゐきて發せしめたり。

斯りしほどに。帝は御病日毎に重らせ給ひ。朝政をも聞召れがたく見えさせ給ふ。諸神に禱り申させ給へども。その効なく。和漢の名醫どもが心を竭して奉る瓦劑も。今は救ひ奉るべうもなし。されど。精神少も亂れさせ給はず。皇太子を御枕邊に召して勅諚ありけるは。朕扈くも天日嗣を受け奉りて。六合を治め。海內寧謐に歸すといへども。新羅の凶賊貢獻を怠り。我を侮り辱むる事。憎みてもなほあまりあり。事あたらしくいふにはあらねど。欽明天皇の御時。かの新

羅が爲に我內官家なる任那を滅せらる。帝これを興復し給はんとし給ひしかど。終に御志を果させ給はず崩御給ひしとき。敏達天皇に遺詔ありて。御志を繼ぐべきよし仰ありき。そのゝち用明崇峻の二朝を經て。その事遂に行はれずして止みしぞ。無念なる。今また同じ新羅が。かの百濟を亡ぼして。我に恥辱を與るこそ。吾終生の恨なれ。吾大日本は小國にして。かの唐國の半だにも及ばず。されども海表に獨立して。かの國と對抗して。屈せず。しば〳〵かの國の爲に恐れらるゝは。吾威勢の三韓に及ぶをもてならずや。もし吾力三韓に屈して伸ぶると無らんには。終に唐國の侮を啓きて。かれが爲に兵を向けらるゝに及ばんと明かなり。されば兵力を振ひ財寶を惜まず。軍を海外に出すは。人の國を貪るに非ず。これ吾國を守るの軍略なるを知るべし。さらでも。敵國外艱無きとき。國つねに亡ぶと謂はずや。朕天壽限りありて。此世を去るとも。搆て〳〵。新

羅を討伐し。唐國の兵を擊ち靡け。武威を耀かすことを忘るゝと勿れとの給ひしが。この年の七月二十八日初秋の風に露置く朝を待せ給はず神去り給ひぬ。帝は舒明天皇の皇后にして獻明特達の聞えあり。天皇崩御ありしとき。遺詔をうけ奉りて。御位に即かせ給ひ。入鹿蝦夷の兩賊臣を誅させ給ひ。のち御位を孝德天皇に讓らせ給ひ又此君を助け大に政事を改め文物を興し律令を正し。我日本の政體を萬世にのこし給ひしは。その時の政事を掌らせ給ひし中大兄皇子大臣鎌足等が輔佐し奉りしゆゑとは。申ながら。この帝の聰明叡智にして。舊習故例に拘泥せさせ給はず。剛明の英斷を奮はせ給はずは。いかでこれを成就す可きましてや。女性の御身にして。海外に軍馬を出させ給ひて。皇國の武威を三韓に耀かせ給ひしは。神功皇后の御後此帝を置き奉りて。外にはあらじと。後の世までも。その聖明神武を。景仰せざるもの無しとぞ。

海表の軍政　唐國の大敗

帝崩御なりしかば。皇太子の御なげきは。申もさらなり。群臣慟哭して。暗の夜に燈を失ひし心地したりけれども。皇太子が英明におはしますをもて。御後の事はさらなり。海外の軍政まで。のこる所なく詔させ給ひければ。いづれも心強く思ひ奉りて。はやく御位に即かせ給へと。勸め奉りしかど。太子は聽給はず漢土には三歳の喪ありときく。我國いまだ盡くかしこの制度に從ふべくもあらねども。その心は異るべきにあらず。且海外の戰いまだ勝敗決せず。先帝の御志いまだ行はれずして。我いかにぞ吉服に就き大寶に陞る可きと仰せて。即位の儀を行せ給はず。明年よりは唯干支をもて年を紀し。元年の號を用ふ可らずと令旨を下されけり。

さても大將軍阿曇比羅夫。後將軍河邊の百枝等の大軍は。百濟に到着

し飛檄をもて州柔の城なる秦田來津。これを報じ。兵伏五穀幾萬件と幾十萬石とを運搬す。兩將は大に喜び。福信自信等と。城を出てこれを迎へ。州柔は。城廣く屈竟の要害なれば。諸軍をこれに屯營せしめ。暫く人馬の息を休め。日を刻して唐兵を擊んとす。

こゝに新羅王金春秋は唐の大將劉仁願が百濟の王城を取り。日本の諸將州柔及び任射岐久麻喜怒の城々に。つぼみしときゝ。大にいさみ。國中の兵を擧て百濟に向はんとせしに。俄に時疫に繫りて打臥しけるが。日を經るまゝに。病重りて。いまは賴み少く見えけるほどに。その子法敏を招き我百濟を滅し高麗を併せ。冥子が開かれし朝鮮の地を一統せんと思ひしに。かゝる病にかゝりて。今は志を果すべうもあらず。唐國の大兵來援せしうへは。その力をかりて。日本の兵を退けんと易かりなん。されど日本の兵士は。勇敢にして。

その大將も武術に長けたり。
とも必ず死傷多くして。その勢挫け。その力倦み。決して久くこの國にとゞまるとを得べからず。さらば。日本は一旦やぶるゝとも。その力は少しも減ぜず。唐國の兵退くに及び。再擧して我にせまると明なり。さらんには再び唐國の援兵をかるとも。彼その兵威に懲りて。容易に來ると無く。因循して。日を經るほどに。我は日本に攻め惱まされて。遂に微塵にならんも知るべからず。汝聞かずや。鷸蚌相爭ふて。各つかるゝ時に及び。漁者ふたつながらこれを獲ると。兩國の間に立つものは。その道理を知らずはある可らず。されば此度の事は唐國の援兵を借りて。百濟を得るとも。後には日本に貢を獻じ。その歡心を求め。永くかの國と好を結びて。唐國の侮を禦ぐべし。日本には英明の君主あり。又時を知るの大臣ありときく。さらば形勢を審にし利害を明かにして。我國を藩屏とし。唐國の窺

窬を防がんとするの策に出でんと必定なり。我ひと度日本と怨を結ぶといへども我より降を求めなんには。喜び受けて。先の怨を釋くべし。これ新羅を守るの萬全の謀なりとありしかば。法敏讀てこれをきく。仰の趣まことに然りとてその坐を退きしが。春秋は終にその次の日はかなくなりにけり。法敏も父に劣らぬ智略あるものなれば。その遺訓を守り。唯唐國と日本との戰を坐視して。その勝敗によりて。いづれにも從ふ可し。唯今兵を出すは利ならずと。父の喪に托し本國に潛み。唯その四境を固むるのみ。さらず顏してゐたりしは狡黠きふるまひなり。嗚呼齊明天皇の百濟を救はせ給はんとの御心は義擧にして。威を海外に耀かし。攻むるをもて守とせんとの遺詔は深謀遠慮これ聖德の眞面目又金春秋が兩國の間に立て時勢を料りて從違を定め國を保たんとする遺言。狡虜の機謀。覇國の餘流。また雄傑と爲すに足れりと。事定りし後。皇太子はこれを中臣の鎌

足に窮に語らせ給ひしとぞ。孔子が夷狄の君あるは。諸夏の亡きが若くにあらずとの給ひしは。これ等の事をや申すべき。

劉仁願はその弟仁軌とならびに。唐の名將にして。その旗下の將にも。智勇の人物少なからず。右營參將續守言は武藝勇敢衆にすぐれて。三尖兩刃の鎗を使ひ。よく百歩の外に鎗を飛せて。人を刺すに。中らずといふ事無し。又韜晦に精く。陣法に熟し。夜戰に妙を得たり。突厥をうちしとき。雪夜に敵陣を襲ひて。三千の鐵騎をもて。一萬五千の虜兵を破り。その酋長の首を獲たり。左營參將段虎臣は武藝のうち。鎗劍には精しからねども。弓法に妙を得て。矢繼早に射出すときは。恰も驟雨の郊原に降るか如くこれを避くるに暇あらず。世に稱して。漢の李將軍廣が再生ならんといひあへり。中營參將韓邦武は膂力三十人に敵すべく。一振の大鐵挺を使ふ。その重さ。五十餘斤あり。これに中るものは。いかなる堅き介冑といへども。

一擊にして粉齏せざるとなし。千軍萬馬といへども。披き靡きその過るところ。鮮血殆ど一條の川を成すべし。これをもて軍中蹈血河の韓將軍と喚びけり。その他の裨將には。よく雙劍を使ふ。張世雄よく長矛を用ゐる唐餘慶よく狼牙棒を舞はす秦命元よく鐵叉を奮ふ牛從駿あり。斯ばかりしほどに。或る日斥候の兵士走せ來り告げけるは。日本の援軍二十餘萬大船八千餘艘にて加巴利の濱に着し。直に州柔その他の兩城に入り候ひぬ。不日この地に發向すべきよし承りぬ。御用心候へかしとありけるにぞ。仁願仁軌はこれをきゝ日本人等が。この援軍の到着をまちしなり。海島の一小國いかでさる大軍を起すことを得べき。恐らくは。難し。二十萬の大兵ありといふは。信とし七八萬に過ぐ可らず。假今十萬二十萬ありとも。恐るゝに足らず。まづ彼等が寄せぬ先に。我より擊て出で。皆殺にせん。いまだ蘇將

軍の高麗の勝敗は聞えねども。すでにかの地に向ひしからには。その援兵は出ると有べからず。新羅は國王病死して。喪中にありといへど。日本の大軍寄せ來るときかば。必ず兵を出し且つ兵粮をも運送せん。我大兵久しく王城にとゞまりて。糧食も中土より攜へ來つるものは。はや半を過ぎ食ひ盡せり。空しく高麗の消息を待つべからず。いでや日本勢がいまだ海路の疲れの愈えぬ間に。踏破らん。さるにても。州柔城のみに向はゞ。たゞ軍勢を手分けして。三城に向ひ一時に攻めかゝらば。救援術無くて陷らしめんと。容易かるべしと。仁願は。中營參將韓邦武と裨將唐餘慶張世雄を率あて。州柔に向ひ。左營參將段虎臣は裨將秦命元と任射岐山に向ひ。右營參將續守言は裨將牛從駿と久麻喜怒城に馳せ向ふべしと。百濟の王城より北の方。瀾澤山の麓を繞り。郎君原に至り。十里にして。州柔

等の三城に路を別つべし。この郎君原は。南北五里。東西八里の荒原にして。處々に岡巒茂林ありといへども。平坦にして。大軍を陣するとを得べし。斯て仁願は弟仁軌を裨將白文悲鉞豹雄等に命じて。諸將を率て進發し。慶川を渡らんとせしに。かなたの方より。一群の兵凡そ一千餘騎旌旗を冬の朝風に吹き靡かせ。劍戟弓箭をのぼる朝陽に耀かし。こなたを指して寄せ來るものあり。劉仁軌はこれを見て。大に驚き。さては日本勢はやくも我城をさして寄せけるか。さもあらばあれ。先鋒の諸將疾く蹴散らして進むべしと。下知しけるに。先陣より傳令使はせ來り。大將に向ひ來れるものは。敢にはあらで。これ新羅の兵にて候。國王金法敏は未だ喪服のうちにありて。軍陣にのぞみがたし。よてその大臣なる朴敬順を大將とし二千餘騎をさし越たりとありければ。仁軌吾いまだ朴敬順に對面せし事

なし。いかなる躰の男ぞ。さん候容貌魁偉にして。勇武の氣象を備へ、新羅の介冑旗幟をつけ。その手の兵士も新羅の徽章を帶びて候へば。疑ふ可も候はずといふ。仁軌は軍曹をみかへり。新羅王のたてまつりし陪臣の名簿をみせよとありければ。軍曹かしこまりぬと答へて。一通の簿書を呈す。仁軌發きみるに。果して朴敬順の名あり。今は疑ふ所なし。さらば對面すべしとて。暫く行軍を止めて。敬順を軍中に召す。敬順おそるゝ〳〵仁軌の面前に拜謁す。仁軌これを慰勞し。三城の形勢兵數を尋ぬるに。敵中の事は審ならざれども。課をもて知りしとある兵馬の數は大方仁軌が料る所に違はず。地理に至りては敬順しば〳〵三城の間に往來するとありて。說くこと甚だ詳なり。仁軌これに便を得て。なほ軍事を議すべしとて。敬順とその手の兵士とを中軍の勢に加へて。商議の時は必ず呼び出してこれをきく。信用大方ならざりけり。斯て諸軍は道をいそぎて。慶川を

過ぎて。山道を經て郎君原に及ぶほどに。斥候の兵走りかへりて。此度は日本勢百濟勢相合して。その勢二十萬騎ばかり。大山の崩れてかゝるが如く。さても大なる郊原眞黑になるほどに。陣取りて。我兵の來るをまつに似たりと告ぐ仁軌はこれをきゝて。いそぎ敬順を招き。朴子きゝ候へ。敵はすでに寄來れり。和ぬし日本の軍勢が。戰の仕樣を知りてやあらん。これを討つべき謀はいかにすべき。說あらば聞まほしといはれて。敬順は兜を脫ぎ。大將の前に跪き。仁軌に答へけるは。敬順嘗て國王の爲に。日本に使して。略かの國の軍制を存知り候つるに。南淵先生といふもの。唐國に遊學し。六韜三畧孫吳の兵法に通じ。かの唐國に名ある李靖將軍に從ひ。蘊奧を極めて候へば。昔の陣法無き。烏合の兵と同じからず侮り難き敵にてこそ候へ。されども勇武餘りありて。智計足らず。兵士等己〳〵の。強勇

に誇りて。敵を輕ずるの風あり。されば陣法ありとも。戰を交ゆるに至りて。我先にと。敵陣に衝き入りて。隊伍を亂す癖あり。もし智略を用ひずして。これと力戰するときは。その大刀勁箭に當ると極めて難し。憚ながら唐國の兵士が持つ所の劒はその芒兩刃にしてて短く。右の手に提て揮ふに宜しく。兩手をもて薙き拂ふによろしからず。又弓もその丈長からざれば。箭もまた從ひて短し。遠に達せざるのみならず。その力頗弱し。日本の兵士は大弓をもて。長箭を放つがゆゑに。我箭いまだ及ばずして。敵の箭はすでに來り。我劒いまだ彼の身に及ばずして。彼の大刀いはや。我頭に加へらる。こゝをもて力をもて敵し賜はゝ恐くは大敗を招かせ給ふべし。先度の戰にやぶれて。唐國の兵數百人かれの擒にせられしは。これが爲とも申すなる。よく〳〵御思案あらまほしといひしかば。仁軌いしくも申たり。尋常の人ならば彼を抑て我を揚じ。將帥の意を承けて。

媚びへつらふべきに。敢然として事實をくまなく述べらるゝ條道理至極といひつ可し。まからば我手はもとのまゝに。三手に分ち。かれの兵を三つに別たしめ。我は和ぬしと。同時に戰をはじめ。我先鋒は僞り敗れて退きなば。敵は勝に乘じて追蹤く可し。我か兵を程よき所の林のうちに隱し置き。敵兵が半退かけたるころに及び。その中央を衝くほどならば。敵は必ず不意に驚き騷き亂れん。その時我は和ぬしとともつて返し。一もみに揉むほどならば。破らずといふこと無るべし。中軍破れなば。左右の手はこれに氣を奪はれて。忽ちにみだれなん。旗色のみだれしに乘じ。追立〳〵三面ともに合せ擊たば。策いかにとありければ。朴敬順は感佩して。物部軍にならんと必定せり。この突厥回紇と戰ひ給ひて。勝利を得給ひしよしは。承りて候へども。いかなる戰法によらせ給ふといふ事をいまだ詳にしり候はざりしに。

今日始めてその妙計を聞くことを得たる喜び感服の外候はず。永く記臆しもて。野戰の法といたし候はんとありしかば。仁願さこそと打笑み。さらば手分を定めんずと。傳令使をもて續守言段虎臣に告げしらするに。軍議は機密を貴ぶをもて。主將の外に裨將といへども是を漏すことを許さず。唯中軍の旗の手に從ひ進退すべしとのみ。諸軍には下知しけり。

されば又日本の大將軍阿曇比邏夫は文武に通じ殊に韜畧にくはしく。先つとし蝦夷が常陸の國に侵入しけるとき。詔をうけ給はりて征討の將帥たり。よく寡兵をもて衆を討つに克たずといふ事無し。又河邊の百枝は武藝勇力は人なみなれども。智計に富みて奇謀をもて。戰に勝利を得るとしば〳〵なりき官位は比邏夫の下にあれども。比邏夫はつねに百枝を重くし某は唯韜畧を諮ひ。又武藝を學びて。いさゝか覺えあるのみ。事にのぞみて謀を運らし。變化の妙をあらはす

とは甚捷し。されば蝦夷等の如き唯武勇に長じて。知畧無きものを討つとは易けれとも。唐國の將軍等が詐謀術數をもて。勝敗を決するに至りては。實に全勝おぼつかなし。また和殿の奇計によらんのみと。つねに百枝に物語りけり。百枝そは將軍の謙遜のみ。百枝何の術あらん。何の智あるべき。されど此度の戰は本國の小冠草賊と同じからず。實にこの一戰の勝敗によりて。本朝漢土の優劣をも定めらるべき最大一の合戰なれば不肖の身をかへりみず。一計を進めまつらんかといふに。比邏夫は大に喜びその計はいかにぞやと問へば。百枝こは衆にて。百濟の福信と。竊に讎したる事にて候將軍も知しめすごとく。鬼室福信は小國の臣とは雖ども。頗る兵略あるものなり。よて百枝が當國に着してより。しば〳〵。その才を試むるに實に一國の軍師と爲すに堪へたる人物と見て候へば。その意見を尋ねぬ。さて計畧を定めて候。その謀は斯〳〵なりと。左右を退けて

ひそやかに遣べしかば。比邏夫は感心大方ならず。福信を召びてこれを稱し竊にその計略をぞ用ひける。斯て今はよき頃なるべしと。日を移さず。進軍の用意に及びけるほどに。忽ち間諜馳せかへりて。唐兵數を盡して王城を發し三手に分ちて。我城に向ふよしを告げければ。さらば急げと。日本勢もこれを三手に分ち餘自信鬼室集斯狹井檳榔等はとゞめて城を守らせ。中軍は比邏夫これを率ゐ。鬼室福信これに屬し。左軍は河邊百枝これに將とし。物部熊守大石これに從ふ右軍は秦田來津これに將とし。百濟の將貴智これに從ふ。總軍凡そ十八萬餘騎はやくも。郎君原に陣を取る。左軍は東の岡巒に沿ひて。一の小川を隔てゝ營を立て。右軍は原の西に鬱蒼たる森林を背にして營を立て。中軍は左右の岡陵を楯とし。これに幾千張の努弓を備へて。敵よせなば。一齊にきつて放つべしと。號令す。この努弓といふものは。昔神功皇后か三

韓を征伐せさせ給ひしとき。はじめて造らせ給ひし兵器にして。その製二樣ありけり。一はその製巨大にして。大箭を遠く放ちて。城壁をも射崩すへし。又一は一發に數十箭を發して。雨霰の如く。降りかゝりて。これを防ぐによしなし。かゝる利器なれば。三韓は一時に敗走せしも宜なりけり。こは此度比邏夫が出陣の時。秘庫を開きて。大弩三千小弩五千張を借し給ひしなり。又福信等に從ふ百濟の兵士も。日頃己が國王の敵の爲に討れし恨は。骨髓に徹し。いかで唐兵を塵にして。これに報ぜばやと。鏃を礪ぎ。大刀を磨き。此一戰こそ。吾國の大恥辱を雪ぎ千秋の基を開くべき時なれと。その雄心勃々として禁むると能はず。日本の雄兵等は。かねて唐人が大國に誇りて。我を慢りやゝもすれば。夷狄と罵り鯨介と賤しめたるを憤り。その大將を擒にし。その兵卒の首を斬りて本國に送りて。我大日本の雄威を萬國に知らせばやと。いまだ鋒を交へざるに。す

でに宇宙を呑み。天地に一蹴せんとする勢あり。されども唐國にも。利器無にあらず。黄帝軒轅氏が阪泉の野に戰ひしとき。すでに砲石の利器ありこは彈壓の器械をもて。大石を數百歩の外に飛すべし。その後漢魏を歴て南北のとき。その制益精しく。發射の法もます〳〵備はれり。まかのみならず。仁願が手に屬する韓邦武が旗下軍曹に雷遠振といふものあり。最も飛砲の術に長じ。かねて訓練せし兵士一萬餘人ありて。その器械も七八千張に下らず。殊に便利なりしは。砲石なりき。韓國は乾燥の地多く。その岩石も質堅くして尖角多くこれを飛して人に中るときは。傷き倒れずといふ事無し。こゝをもて。韓人には飛石をもて兵器に代ゆる者古より多かり。今遠振か妙術をもて。訓練したる兵士がこの飛石を得て。いかで奇効無る可きと。唐兵すべて勇みあり。日本の大弓勁箭は利ありといへども。その箭種は。盡る事あり。我飛石は土地に

取ればこれ盡る事無きなり。無盡の砲石をもて有限の弓矢に敵ずるに。いまだ戰を交へずして。勝算すでに我に在り。倭兵壹人も生しては還すべからず。なほ長驅して日本に攻め入り。かの聞えたる。倭鐵封疆ならざると無に及ばゝ。また愉快ならずやと。大將仁願が士卒を勵ましたるも。またその故無きにはあらざりけり。

さても。雨軍次第に近よるにぞ。萬馬の土煙は空に冲りて朦朧とし。て霧の如く喊の聲は。山岳に響きわたりて。坤軸もこれが爲に崩るゝかと疑はる。雨軍の銜く息は風なけれども。草木を靡かし。劍戟の光は朝日に映して。電光の雲間に閃くに似たり。あはや。雙方の矢際近くなるまゝに。日本勢より切て放す矰箭疾風の枯艸を吹が如く。空中に鳴渡りて飛び來る第一箭は。かの大弩弓なりければ。唐

軍の眞先にすゝみて。砲石を放たんとしたる兵士兩三人忽ち兜を射貫かれ。介冑を碎かれて死傷を知らず打伏したり。續きて。飛來る弩弓の箭は小なりといへどもその勢風雨の如く防ぐに術無きものから。唐兵の鎧甲堅利なれば。いまだ多く傷くに至らずされば。唐兵は。これを事ともせず。すは矢頃はよきぞ。はやく砲石を飛ばせよと。韓邦武は馬上に令旗を振り。動かし。指揮しければ。これに應じて。前軍三千餘張の砲石を一齊に切て放つ。激然として迸る砲石は風を截て天を走り。雨を破て空を飛ぶ。大なるあり。小なるあり。尖りたるあり。長きあり。飛ぶ時碎けて細石となりて。敵の目を傷り又地に落ちて。再び飛び土砂を蹴て。と當るべくもあらざれども。日本勢は少しもひるまず。大弩小弩を隙間もなく。射かけ大弓勁箭をその下より飛ばせ或は開き。或は闔ち。千變萬化の手を盡す。かくて和唐の兩軍息をくれず。手足を休

めず。石を飛ばし箭を放ち。死を顧みず。傷を恐れず。相戰ふこと二時餘り。いつ果へしとも見えざりけり。

この時左右の兩軍も。同時に戰を交へ。同じく飛石弩箭をもて。いづれも一步も退かず。屍を引きのけ。傷者を扶け。命かぎりと爭ひしは。懼ろしともまた畏ろしゝ。比邏夫は馬上より。この躰をみて。大にいらち飛道具の戰は無益なり。刀を用ふるは。此時なるぞ。はやく下知を傳へよと。接戰せよ。我日本とりて。振り動かすと三度。喊の聲を揚ること三度。三處の軍勢は之をみて。すはや。短兵をもて。中軍の青旗をめかし。弩弓隊の左右より。疾風の如く敵陣へ斬て入る。大刀を抜きつれ。長矛を揮りひら飛石もこれを中つること能はず。紛々として斬り倒さるゝもの數を知らず。されども。唐國左右の兩陣は。なほも飛石をもてこれを支へ。

短兵の衝突を防ぎしかば。然すがの勇士も進みかねてぞ見えたりける。しかるに。その中軍は忽ち突き崩されて逃げ走ると三町あまり。日本の中軍は勝に乗じ。追かくるほどに。この原の左右の茂林ある所に至るに。唐國の中軍忽ち赤き旗を磨動する數度なり。比邏夫は馬を駐め唐兵偽りまけて。我を誘き寄せ伏兵をもて。横合を撃んずると覺えたり。さはあれ。驚き恐る可からずと。軍曹に命じ。我中軍にて白き旗を前後に動かし。喊の聲を發すること二度。敵味方とも。その意を悟らず。これはいかにと見るほどに。忽ち。茂林のうちより。唐國の伏兵ども。散〳〵に打ち成されて。中軍に崩れかゝる。跡よりはげしく追出來るは。これ日本の勢なりけり。さては大將はやくも伏兵あるを知りて。その不意を襲はれしかと。あな心地よしといふ程に。俄に唐國の後軍も又亂れ騷ぎ。我軍中に謀叛のものあり。ひき裏んで打取らずやと。罵るもあり。否敵に背を絶れしなりといふものあり。中軍大に慌て驚き八方に逃げ走る。斯る所に唐軍の背より日本の旗を差し上げ。跳り出るを見に。その眞先に馬をすゝめしは。思ひもかけざるかの新羅の聲高く。唐國の大將軍劉仁願冷は逃るゝ道もなし。我は百濟の達率鬼室の集斯なり。日本將軍の令に從ひ偽りて新羅の援兵と稱し。汝等を欺き後軍にありけるぞ。斯くはかへすまじ。命惜くば。馬を降りて縛に就けと。呼はり〳〵斬て入る。仁願は大に驚き。さては敵にたばかられしよな。されども僅の小勢恐るゝに足らず。者共はやく撃てとれと。馬上に身をあせりて。下知しけれども唐兵前後に敵を受けて防ぐに術なく度を失ひて討るゝもの數を知らず中營參將。韓邦武は騒ぐ兵士を罵り勵まし。馬をすゝめて例の大鎌槍を打振〳〵。近く日本の兵を左右に撃倒し。仁願を救ひ。一條の血路を開き。遁れ出んとす。比邏夫はこれをみ

て。　あれは。　大將軍劉仁願と見ゆるぞ。　あれ擊ち取れと呼はれば。日本の裨將馬飼駿足といふものあり。　馬を拍て手に八尺の長矛を提げ追驅けたりこの時韓邦武はまたも我兵が前後より斫て蒐るを。引受て戰ひ居たりしが。　きつと見て。　大に怒り將軍を侵さんとするは何者ぞといひさま。　前後の兵士を忽ちに撲ち倒し馬を飛して。駿足が背より鐵挺を擧て擊んとす。　駿足もさるものなれば。　少しも騷がず。　汝は韓邦武か。　よき敵こそあんなれと。　馬を引かへし。矛を奮て実てかゝる。　邦武一言を交ゆるに及ばず。　鐵挺もて受流し。いらつて突を丁と跳ね。　引んとするを付入て。　眞向徹塵と擊ちおろす。目ばやく閃りと身を代はす。　狙はづれて。　鐵挺は駿足が馬の頭を打砕きしかば。　然すがの駿足もたまりかね。　忽ち倒と馬より落つ。　得たりと。　鐵挺を振り上げて馬上より發石と擊ちしかば。　萬夫不當の駿足もこの一擊に腦蓋を粉碎にせられて。　韓土の露と消しとそはか

なけれ。　仁願はこの隙に馬を鞭て飛が如く逃げ去たり。　鬼室集斯はこれを見て大將を逃さじと。　かねて日本に使せしとき。　習ひ覺えし大弓を滿月の如く引固めて。　兵と放つ。　その箭誤またず。　仁願が鎧の背に中りしかど。　札よければ那とりて注んとするほどに。　韓邦武は馬を跳らして。　近づき來つ。　汝は僞新羅の大將よな。　我を欺きし天罰思ひ知らせんといふまゝに。　鐵挺を振翳して擊てかゝる。　集斯こはかなはじと。　馬を廻して本陣に引かへす。　のがさじものと。　邦武は飛か如くに追來るを。　比羅夫は見つゝ。　大日本の神箭をみよといふ儘に。　弓取直して引絞り。　箭さと立つ。　然すがの邦武も唯一箭に射貫れ。　馬より落て死したりけり。　きつて放てば。　其箭は電光の如く飛來て邦武が眞向にや擊かけて。　これにぞ驚く唐餘慶張世雄今は戰ふ擬勢も無く。　散々になりて馳走し。　中軍遂にやぶられにけり。　さるほどに。　唐の左右軍は日本

の兵が大刀を振て進み來るを。　まばし砲石を飛にして。支ゆるものから。忽ち中軍敗走する躰をみて。大に驚き。さては味方に内應の者ありつるか。さらずは。間諜のまきれ入しにぞ。有らんずらん。とは吾軍中にも油斷ならじと。いひ合はさねども。左右の兩軍一陣に合併せんと動搖めきしかば。日本勢の東西兩軍河邊百枝秦田來津は。その手の屬將物部龍。守大石。百濟の貴知等。すは中軍わはや勝たるぞ。此機を扳かず。左右軍をも。蹈み破れと。兩軍齊しく喊の聲を合せ。大刀を振り閃かし。大鏑を雨の如く射かけ。唯これ大山の崩れかゝるが如く。滄海の飜るが如く。押し懸りしかば。唐軍わはや。敵に背を襲はれしと。前をのそみ見るものなく。唯一條の活路を求めむと。砲車彈器をうち棄楯矛を投げ棄て。馬あるものは。鞭を加へ。馬無きものは足をはかり。味方の走るを敵の追かくると。驚き懼れ。二十萬の大軍木の葉の散るごとく。八方に散亂す。

されば雷遠振の飛砲も。接戰には。そのかひもなく。その手の砲手も。半は日本刀の爲に屍を寸段せられて。原野の艸を染むるのみ。左軍の大將段虎臣然すがの猛將なれば。獨り手下の勇士五六員と原頭に騎馬を駐め。日頃の手鍛の弓箭をもて。日本勢が勝誇りて。追驅きぬるを。兩三騎馬より下に射落したり。斯る所に秦の田來津は。にぐる唐兵を追散らし。忽ちこゝに寄せ來り。大將をみて。聲をかけ。はやくも箙より箭を扳き出し。弓引絞り日本の鍛ひたる鏃の銳をみよと呼はりければ。段虎臣もまた同じく弓取て雙方ともに斬て放つ。然しも精兵妙手の射たりし箭は。いづれもともに。中央にて毫しと中り。鏃碎けて飛散たり。矢續疾に射出す。虎臣が箭は田來津が二の箭を注んとする左の臂を射削りて。背につゐきし雜兵が胸板をつと貫き鏃白くあらはれたり。我屬將物部龍これをみて遠箭は無益。いで。大將を手捕にせんと。橫合より馬を飛せて擊

てかゝる。段虎臣は不意をうたれて。箭を放つ暇あらず。弓を擲て。劍を抜きて。熊と戰ふ。虎臣の部下は。主將を擊たせじと。矛を揮ふて。熊を圍む。熊は大刀を前後左右に打振り。忽ち壹騎を斫て落す。されども多勢に壹人いと危ふく見えしほどに。田來津遙に箭を注がへて。虎臣が隙を見て逃れ去んとするところを。狙はづさず射落したり。熊は得たりと斬てかゝる敵兵を。打靡け。馬より飛降り。やがて虎臣が首を擧たりけり。殘兵は膽を冷し。命かぎりと逃げたりけり。續守言は右軍に將たりしが。もとより飛槍を善くしければ。近く日本の兵士を兩三人忽ちに刺し斃し。馬を拍て敵中を乘り脫け。八町あまり逃たりしを。守の大石その手の兵士と飛が如くに追かけしに。續守言は。例の飛槍をもて。大石を目かけて投げかけしに。大石は物ともせず。馬止にてこれを受止め。やと聲懸て擲かへせば。守言も然るものなれば。忽ちこれを中に受け。こ度は。是を揮て突てかゝる。大石は腰なる大刀を抜てわたり合ふ。勇士と勇士との戰なれば。さばしは雌雄を決せざりしが。守言の戰に力疲れて。大石に敵し得ず。持たる槍をうち落され。劍を抜んとする所を大石は馬をつとよせ。引組で捻ぢ伏せたり。守言は飛槍に妙を得たれども。大石が太力には敵し難くやめ〳〵として生捕られけり。

是に於て我三軍は全く唐國の三餘級。生捕は左軍の大將續守言を始めとして。三千餘人その外弩弓にあたり。戰馬に傷けられて。死傷せしもの數を知らず。大勝利を得てければ。比邏夫はさばらく原頭に人馬を憩へて。咏方の死傷を檢みするに。思の外に死傷少し。一手の將には馬飼の驗足の討たれしのみ。田來津は臂を射削られれども。骨に至らず。士卒の戰死五百餘人傷きしもの二千あまりに過ぎず。百枝廼信進み出て。唐將

仁願すでに大敗して。膽を落せり。この勢に乘して。王城にすゝみなば。一擧にして手に入るべしとすゝめしかば。比邏夫その議に從ひ。諸軍に下知を傳へて。その夜王城に攻寄せしに。留守の劉仁軌はやくも味方の敗北を傳へきゝ。途中に兄仁願を迎て。王城は防戰によろしからず。一先熊津に退き。要害により。蘇將軍の援兵を待ち。再擧を謀るべしとて。敗兵の逃れ來るをまとめ。王城を棄てゝ。熊津にぞおもむきける。されば諸將は一箭をも費さずして。忽ち王城を恢復せしかど。こゝは戰守ともに便ならずとて。守の兵を留め。遂に州柔任射岐久麻喜怒の諸城に入りて。しばらく兵氣を養なほ下毛野稚子間人大盖。巨勢譯語等が高麗の勝負を待ちて。かの手と唐兵を挾み擊んとぞ謀ける。さて又。唐の生虜續守言等三千餘人は。日本に護送し捷戰の始末をしるして。露布を築紫の行宮に上りしかば。皇太子これを聞召し。大に喜ばせ給ひ。唐兵の生擒ども

に勅し。歸らんとするものは。これを還し。留まらんとするものはこれをゆるして。諸國に住せしめられしが。續守言壹人は思ふ旨おはしますよしにて。これを行宮に留め置れ有司に仰せて厚くこれを勞はり。衣服飲食も彼國の制度に倣ひ。禮遇なほざりならず。守言は太子の恩遇に感じ。げに東方には君子國ありと。かねてきゝしかど。斯くまで。なさけある君は得がたしとつぶやきゐたりけり。

こゝにまた。下毛野稚子等は。比邏夫の後に日本を發せしか。はやくも高麗におもむきしに。高麗王は大に喜び。日本の諸軍を城中にぞ厚くもてなしけるほどに。唐國の將軍蘇定方突厥の王子契苾加力大兵を率ゐて攻來り。高麗城を圍みけれども。折しも十二月の末にして。寒氣殊にはげしく。士卒凍餓して。戰最も難儀なり。稚子大盖は。高麗の君臣とゝもに議し城外に屯を築き。城中と策應し。日夜激戰すれども。定方戰に熟したる大將なるに。契苾加力も蠻兵を

率ゐて先鋒となり。死を極めて戰ひければ。たやすく破るべくもあらず。新羅の援兵はいまだ出で來らざれども。蘇定方は士兵を驅り催ふし。我兵糧を百濟に運搬するの道路を塞ぐをもて。百濟を救ふこと能はず。定方加力も高麗を破り。日本の援兵を塵殺してのち劉仁願兄弟と一所になりて百濟を一定し。新羅をその擧に乘じ。幷呑すべしと。かねて謀りしに。高麗日本の兵強くして容易に忽ち破るべくもあらず。空しく對陣して。日を費しけり。斯る處に忽ち一日唐國の陣中騷ぎ立ち。屯營を毀ち。幕張を引き下し。輜重を馬に載せ。人夫等此彼所に奔走す。巨勢譯語これをみて。いそき中軍に至りて下毛野稚子に向ひ。將軍今日の一戰に。唐兵を破るべき時機到來せり。急に出陣の用意あらまはし。そはまたいかなるゆゑぞ。されば侯。かねて百濟の王城に立籠りし唐兵。我日本の阿曇將軍と郎君原の戰ひありて。敵味方の勝負はいまだ決せざるよし。

きのふ風聞ありしが。唯今唐國の陣營に當りて退陣の用意に見ゆ。これ必ず唐兵大敗せしと覺えたり。さらずば。俄にかゝる騷あるべきや。げに〳〵然なり。さらば出よと。忽ち陣中に令を傳へて。唐軍の南のかたより。聲てかゝる。大盖は使をもて高麗の城中にもいひやりければ。高麗王はその大臣壹伊文に命し。精兵をすぐりて八千餘騎唐軍の西の方より進ましむ。この時唐兵は北山の麓に陣してありければ。遙に日本勢の進み來るをみて。さては城中にもすでに我兵の退陣を察せしと見えたり。郎君原の戰は勝負いまだたしかならざれども。日本勢の出で來るをみれば。必ず我軍やぶられしならん。今はあの地に援兵を出すとも。その期に後れてせんなからん。しかし。日本勢を一當あてゝ。その虛に乘し軍を退くべしと。大將蘇定方契苾加力は軍を兩手に分けて待居たり。加力は高麗の壹伊文に當り。蘇定方は稚子に當り互に近くまゝに。

喊を合せて攻め戰ふ。契苾加力は長八尺餘にして鬚髯神の如く蠻鐵をもて製造せし鎧を透間もなく着下し。黑き馬の八寸餘りの駿足に跨り。手に一丈六尺の點鋼槍を執り。眞先に進んで戰を挑む。高麗の盍蘇文も名ある勇將なれば。その部下の猛士少からず。郭文龍といふものあり。もと遼東の產なれども。勇武ありて。用られず。不平に堪へず。遂に高麗に走りて盍蘇文に屬しゝなり。もとより蛇矛を善く用ひて。萬夫不當の勇あり加力が人も無げなる振舞をみて。大に怒り。蠻夷の醜奴己が些の武藝に誇り高麗に人無しと思ふか。その義ならば目に物見せんと。馬を進めて。加力に衝てかゝる。加力は騷がず。同じく。馬を拍て點鋼槍をひつしごき。わたし合ふ。蘇定方はこれをみて。契苾を討すな進めやものどもと。下知しければ唐兵は高麗勢恐るゝに足らず。我中國の威力をみよと。長劍大槍をうち振り〳〵進んだり。下毛野稚子は蘇定方の先鋒なる周敢當と

戰ひしが。敢當勇なれども。日本の大箭に兵士數多討たせ。怺らへず。後陣の方に崩れかゝる。稚子大盖は潮の湧が如く攻め懸り。忽ち敢當を一箭に射落し。なほも進て定方が本陣に突て入る。定方は斯と見て。加力に高麗兵をうちまかせ。稚子大盖に向て防ぎ戰ふ。然すが大國の良將なれば。士卒を使ふこと。手足の如く。ちとも隙無れば。武勇に富みし稚子も殆ど勝ことを得がたくぞ見えたりける。斯る所に百濟國なる久麻喜怒山の城主なる佐平餘自信には阿曇比羅夫が將令をうけ。五千餘人の百濟兵を率ゐ。物部の檀弓は。二千餘人の日本勢を率ゐて。高麗を援け來り。はや後陣の方より擊てかゝり。やおれ唐人等汝等の一方の主將と聞えし劉仁願仁軌は。すでに去る日郎君原の戰に敗走し。熊津さして落うせしぞ。のこすは蘇定方契苾加力の二人なり。いで生捕りて日本の土產にせん。そこ一寸も動なせそと。呼はり〳〵斬て入る。蘇定方は大に驚き。劉將軍の

戰は勝負いまだ詳ならざりしが。さてはいよ〳〵敗走せしか。しからんには。我歸路を敢に遮られてきりぬけて。劉氏と一所になり。一人も免る可らず。はやく圍をらじと。なほ本國の援兵を待つにしくとあ契茲に命じ後殿とし。蘇定方は追かくる日本勢をきり靡け。軍を下知して退きけり。加力は將令を得て。己が手の兵士等と小山を小楯に蹈止り。走きりに競ふ日本兵と防ぎ戰ふに。かの郭文龍は官軍のうちに。加力を見失ひしが。この時馬を疾風の如くに走らせ。蛇矛を打揮り突てかゝる。加力は蜘ひ。中國の叛賊やさしくも。この大王に敵するよな。いで。此世かの點鋼槍をとりのべて。蛇矛を發石とうけとゞめ。執り直さんとする所を。えいといひさま。文龍が腰を目懸て丁と突く。然しも大力の勇士が用ひし大槍に乘たる馬まで。刺し貫かれて。人馬諸共

かくてそ。日本勢も。その勇氣に辟易し近く者無く。雉子大盡も歸師は追ふと勿れといふと有り。彼等を殺すも。殺さゝるも。我大勝利に害なかるべしとて。鐘を擊て追兵を止めしかば。定方加力は。つゐが無く。討のこされたる兵を率あて。劉仁願仁軌が立籠りし熊津城に至り。三將ともに評議をこらしけるが。かく大敗せしよしを。本國に注進せば。いかなる罪をやふむらん。三十萬の大軍に將として敗れを取るときは。その罪死に當れるを。唐の刑律とす。されして三將ともに死を免れがたし。いかにすべきとうち案ずるに。所詮は監軍使に厚く賄ひ。又韓國日本の貨物を竊に多くあがなひ。これを兩國の貢物なりと稱して。戰捷のよしをもて奏聞すべしと。監軍使高景芳といへる宦官をすかしこしらへ。かたの如くとり計らひ。なはまた捷軍をそ請にける。ことは宮軍戰勝を得たれども。蠻地の風霜に冒されて。死するもの多ければ。そを補はん爲と。又この勢に乘

じて。日本を攻取らんとするの準備なりと奏しけるとなり。唐の則天后は雄畧不世出の婦人なれども。邊境の利害には踈かりければ三將が狡言にすかされて。大に喜び金銀綾段駿馬寶刀を恩賞とせられ。さらに郡國に命を下して。應援の兵を徴集せられしかど。邊地におもむくを恐るゝもの多ければ。州縣も。その訓諭に苦しみ。俄に大兵を得ると難く思はず。月日を過ごしけり。狄仁傑は。三將が奏狀は。まことしからず思ふものから。その僞なる證據も有らねば。彈劾す可くもあらず。諫めて聽き入れらるゝ時宜に非ざるをもて。暫く日を嘶み。そのなりゆきを見あたりけり

この歳もくれて。明れば壬申の歳に至りしに唐の三將は熊津に潜て頭を出さず。新羅もまた國を守りて出でざりければ。百濟志ばらく無事にして。我國の諸將もまた進み擊つことをやめたり。こは皇太子の令旨ありて。國喪いまだ三歳を經ず。彼より戰を挑まばせん方なく。これに應じて戰ふとも。必ず我より兵を出す可らずと。おきてさせ給へばなり。これ志かしながらして。太子の深慮のおはします所にて。唐國と戰ふは唯我國の威を示すのみ。地を奪ひ。人を擄にするは本意に非ず。されど彼より和を求めずして。我より兵を罷むるときは。弱を示すの嫌あり。よて兵威を養ひ。みだりに小利を貪るべからずとの旨なれども。比羅夫等には。その深意を示し給はず。こゝをもて。大喪に托して。その進擊をとゞめ給へりしなるべし。百濟王豊璋は汗馬の勞なく。亙平の智も無く。深宮に安座して。百事を佐平の福信餘自信に委ねけるに。此度日本の勢をもて唐國の大兵を打破り。百濟の王位はじめて堅固の幸を得たりしかば。喜に堪へず。されど起居飲食ともに制限ありて。酒色の慾を縱まゝにすることを得ず。福信等が爲に政を專にせらるゝは。人君の道にあらずと。竊にこれを恨みしかば。いかにもして。もとの如く財寶婦女を

も己がまゝにせんと。日夜肝膽を碎きけり。一人貪戻なれば一國亂を興すとは是か。いとをそるべし。

百濟滅亡す　日唐和を講ず

阿曇の比邏夫等の諸軍百濟國に滯留すでに二年に渉りて。これが爲に百濟はさらなり。我國にもその費用莫大なりとて。諸臣合せ奏し召し還させ給ふべしと申す。是より先皇太子は先帝の靈柩を奉じ海路を經て難波津より大和の國飛鳥の都にかへりあまし。ます〳〵。中外の政事を聽き給ふに。中臣の鎌足もまた帷幄に侍し。機密にあづかりけるにぞ。太子諸臣の奏を示し。いかにすべきと問せ給ふ。鎌足答て申やう。昨年の十二月比邏夫等かの國に於て。唐國の大軍を打破り。敵將をさへ擒にして。威勢海外に遍ひ。高麗新羅その餘の國々我武零を懼れざるものなし。かれて殿下は唐國と長く怨を結ぶは上策にあらざるよしは。まろし召さる所なり。かゝれば長く大兵を彼地に留め置れんは宜しからず。さりとて盡く撤すべきにあらねば。一軍をもて。非常の備とし。その餘は盡く歸朝せしめらるべきもの歟と。申しければ。太子その言を嘉し給ひ。乃ち阿曇比邏夫が軍を召し還し。下毛野稚子が一軍と秦田來津狹井檳榔の一軍とを留めて。高麗百濟の鎭撫として。なほかの地に在留すべしとの。敕令を下させたまふ。こゝに於て比邏夫は諸將を率ゐて。大船數百艘にのりて。海上恙なく。築紫に着し。なほ海路難波の津に至りしかは。太子中臣鎌足に仰せてこれを迎へしめらる。比邏夫等軍裝を盛にして。上陸しやがて。軍事を奏聞しけり。こゝに於て。兵士等に恩賞を賜ひ。比邏夫以下の諸將が位階を進め。金帛を賜ふと差あり。文武の諸臣和協して。朝廷ます〳〵無事なりけり。されば百濟を擊んとせし

は。比邏夫等が意見にてありしを。鎌足は本朝の疲弊を懼れて。止めまゐらせけれども。先帝は聽かせ給はず。百濟を救ふは義擧たりとて。築紫まで御幸あらせ給ひき。太子はその中央の義を執りて。一度武威を顯はし。頓てこれを召し還し給ひければ。國土の費少く。して。その威勢は遠く四百餘州に及ぼし給ひぬ。この君のちに天智と謚し奉りしは。天聽敏智のえるしと世の人申あへり。かゝる明智のおはしますに。引違て。百濟の新王豐璋は。比邏夫が歸朝せしより。眼のうへの瘤をとり去られし心地して。なほ此上にも秦狹井の兩將も召し還されよかしと思へども。さん方なし。されど兩將は營所を州柔城の要害の地に置きて。日に兵士を訓練するのみ。政務に預るとは。朝廷の賊なれば。一言に及ばず。かゝれば今は佐平の福信餘自信をのみ。世にいぶせく思はれけり。大勝を得たりし時。かの執得は大赦に卑を宥められて。再び近侍に召し加えら

れ。幾程もなく。また愚率の位に還りぬ。福信は國中の政務に暇なく。濟國の郡村が戰馬に荒れしを。撿知の爲に州柔城を出て。數日を經たり。餘自信は佐平の位にあれども。出仕の事稀なり。王は日頃の放蕩やうやくこの時にあらはれて。また執得を近け。牡丹を寵し。飮宴に日夜を去らず。或日執得に向ひ。予いやしくも。百濟王の位にのぼりて。皇帝のつぎに在り。しかるに。時勢とはいひながら。その臣僕たる福信等に權威を奪はるゝこと無念なれ。今唐兵すでに退きし。當國無事なり。いかで福信等を逐ひ退けて。我一國の政事を專にせんとす。汝よき謀あらば敎へよとありければ。執得うけ給はり。御尤も道理あり。頃ひそかにきくに。福信をば〳〵。日本の帝に奏し。吾君は王者たるの德なし。これを廢し。別に王を立給へと申しゝとぞ。先にするときは。人を制し後るゝときは。人に制せらる。

はやく彼を討取り給はざるに於てはその禍測る可らずと申ければ。王はげにとうなづき。禰信は。初より吾をあしとは思はざめれど餘自信は吾王位にのぼりしを喜ばずと聞えたりき。去るにても禰信の愛妾桃葉はいかにしつる。久しき戰爭にて。かの女子の事は忘れゐたりきと。ほゝゑみていひければ執得。吾王の聲きを忘れ給はぬ事の。おかしさよ。この頃禰信は公事により。家に居るとの稱にて候へば。よき折なり。あながちに召させ給はゝ參るべしと答へしに。王は首を振りて。いな〳〵。予その色を愛れとも。彼はなか〳〵に吾心に從ふべからず。なまなか召し出して。吾辱見むより。はやく禰信奴をおしかたづけなば。かの女子は自ら我物となるべきぞといひければ。執得さらば。しか〳〵の謀をもて。容易く打取り候ひなん。されど。日本の將軍等を。すかしこしらへさらむに於ては。反て大なる騷動を引起し候ひなんず。その謀はしか〳〵にせさせ給へ

と。竊に謀を定めけり。

執得が宮中にて。王と密議を凝しに騷動し王妃のもとに仕へたる侍女三人。王宮警衞の兵士の爲に縛せられて。この時執得は宮中督衞として。王宮警護の長官たればなり。次の日の朝の事なりき。宮中俄

この日王は俄に近侍數人を從へ。竊に秦田來津が營所に赴き。秦將軍に竊に申すべき事ありて。王みづから來れりといはせければ。田來津いかなる事出來しと急ぎ出て對面しければ。王は左右を退け。涙をはら〳〵と流し。豐璋不肖の身をもて。日本國皇帝陛下の恩を蒙りて。再造の賜ありて。いやしくも王位を辱くせり。しかるに佐平禰信己が權位に誇りて。頗る威權を縱まゝにし。あまつさへ豐璋にすゝめて。日本國に叛き唐國に內通して國を保たんとすと申す。豐璋が他所に出でありしとき。みだりに宮中に入

りて。吾妻と密會せり。その名は國事にかゝれりといへども。その實は然らざるよし。宮婢等白狀によりて知られたり。もと吾妻は日本の朝廷より賜はりし所にして。豐璋みだりに。これを離別すること能はずといへど。彼いやしくも王妃の位に備りしうへは。これ一國の母たるものなり。嫌疑を避けずして。大臣を宮中に引き入れしは。これ國法に違へり。ましてや。密會の證跡歷然たるをや。福信は獘國の爲に再造の大功あれども。國の大法に易ふ可に非ず。こゝをもて誅戮を加へんとす。但王妃は朝廷の賜ふ所なれば。豐璋私にこれをいかにもす可らず。仰ぎ願くは將軍その條理を正して。國の紀綱の紊れざらむことを望むとありければ。田來津大に驚き。王妃は。日頃賢良の聞あり。又鬼室は國の大臣にしてその名朝廷に知られたるものなり。その罪跡は證據ありといふとも。いかで。殿下がみだりに。斧鉞を行ふ事を得べき。決して。その義は宜しからず。田來津

勅命をうけ奉りて。軍事の外は國政に干預す可らずとおきてさせ給へども。これはこれ。國の大事なり。他の小事と同じからず。田來津に於ては。殿下の命を承諾いたしがたしと。色を變じていひければ。王はさらば如何にともすべからず。暫く再案して請申す所あらんとて。急ぎ王宮にかへりぬ。斯る所に。州柔城を去ること三十里ばかりの大運府といへるに。唐兵出て。民家を剽畧するよし。その地より飛報あり。日本將軍の出陣を請ふ。時に狹井檳榔は久麻喜怒城に在りしかば。田來津唐兵久しく我境を侵さず。これ我不意を討むとするの謀なるべし。いでみづから向ひて手痛く戰ひ蹴散らし。捨むづと。時刻を移さず。屯營の兵五千餘人を率ゐて。かの地に向ひて進發せり。

斯とも知らず。鬼室福信は。境內を巡視して。至る所として。民間の疾苦を問はざること無く。富むものを諭し。財を散じて。貧民を救

はしめ。又州縣の官吏に撫民の法を敎へ。且つ唐兵敗れたりといへども。なほ熊津に在りて。時機を伺ふに似たり。決して守を疎かにすべからずと。民兵を興して。各〻その鄕村を警衛するなど。心を用ひざる事なし。人民福信が忠誠にしれを愛敬して。能民情に通ずるをもて。こしと。いはぬもの無りき。吾王よく此人に委任し給はゝ。百濟長く無事なるべ

視數月に經りたるをもて。福信はなほも。至らぬ地多けれども。巡しとて。一日歸裝を整へて。一先づ州柔に還り。よしを王に啓白すべが。家に留め置きし桃葉がもとより。出發せんとする所に。州柔城より福信その書を發きみしに。君が外に出給ひしより。密使あり。福信何事やらんと。とやらん不審事ども。少なからず。罪無き王妃の宮に事奉る侍婢數人とらはれて。恩率執得ぬしの手にわたされたり。俄に歸らせ給はば。恐は不測の禍起らんか。はやく。秦將軍餘佐平の君たちに。謀

り給ひて。福信を未然に防がせ給へとあり。唐國の兵敗れて。境内無事なるに。王も福信眉を蹙め。ひしより。させる失德の事も聞えず。執得もまた過を悔ひて。近頃讒愼の行ありときくに。また如何なる事やあるべき。余一度已とを得ずして。君を要して。移城の事を圖りしさへ。心に耻る所多し。いかで再び日本の將軍の力を借るとを得べき。桃葉はさかしといへど婦人なり。婦人の言を聽きて。君に對して禮を失ふ事。大丈夫の耻る所なり。さはれ。王の過失ちはしまさむには。疾く立かへりて。諫を上るに若くことなしと。桃葉が諫めを用ひず。從者をいそがして日ならず。州柔城に立かへりぬ。福信州柔にかへりしかば。王執得に命して。福信を王宮に召さしむ。福信衣冠を改め。館を出でんとせしに。桃葉いそがはしくこれをとゞめ。さきにも。諫め奉りしごとく。王宮の躰。この頃前の如くならず。王妃は王と御中睦じから

ず。例の牡丹のみ時を得がほに。側を去らず。殊に又侍婢の縛せられしは。一方ならぬ嫌疑の君にかゝらせ給ふよしを承りき。今日の參仕は思ひとゞまらせ給へと。申しけれども。福信きゝもあへず執得は猥瑣の小人懼るゝに足らず。吾王は酒色に耽り給ふのみ。いかで吾を害し給ふ心のおはしますべき。もし疑惑を抱きて。出仕せずにもあらば。反て。貳心ありなど疑はれて。寃罪に陷ゐられんも測られずと。桃葉が。さま〴〵に止むるを聽かず。袂を拂ひて。王宮にぞ赴きける。

福信は例の如く。王宮に參り顯政殿といふ所に至りしに。王はいまだ出御なし。翠帳高く捲きて。爐香馥郁たり。禁鐘隱々として午時を報ぜり。福信はわが坐位に就き。あたりを顧みるに。常に出仕せる警衛の官一人もあらず。また近侍の臣も出で來らず。こは不審と思ひし處に、次の間にあたり。履聲いと荒く聞えて。走り出來るも

のあり。何人にかあらんと見るに。これ恩率執得なり。武士八九人その後に從へり。福信大に驚き顯政殿は大臣にあらざれば。入ることを得ざるは濟朝の法度なるに。こは何者のゆるしを得て。武士どもみだりにこゝに來れると。いはせもあへず。執得が聲を怒らし。やおれ佐平の福信。汝唐國に內通し。我王を廢し奉らんとするの聞あり。あまつさへ王妃多氏と密通して。宮禁をはゞからず。大逆無道その罪萬死に當れり。すみやかに。縛に就けとのゝしれば。福信憤然として大に怒り。執得汝は王を惑し奉りて。國政を亂ること。すでに一國の知る所なり。こゝをもて罪をかふむり。すでに斬らるべかりしに。福信これを憫れみ秦將軍に請ふて赦せしに非ずや。志かるに。恩を忘れ義に背き。我を讒することそ不敵なれ。ましてや。聞も汚らはしき密通など。福信は頂天立地の男子なり。何ぞ。さる不義の行あらんや。唐國はこれ我仇なり。物に狂はゞいざ知らず。人心

あるもの。いかにぞ敵國に降りて。我國を賣るべき。はやく殿下をこゝに請じ奉れ。その黒白を分つべし。凶惡無慙の賊に對して。まだ何事をいふべきや。と罵りければ。執得は。これに答へず。懷中より一通の敕令を出し。吾王殿下の敕旨あり。福信つゝしみて承れ。鬼室福信罪あり。佐平の官を停められ。獄に下して。その罪を糺問せしむべし。もし敕旨に從がはざれば。立どころにこれを誅戮せよ敕旨かくの如し。ものども。福信を面縛せよと呼はりしにぞ。武士等はかしこまりぬと。左右より走りかゝりて。福信をとし伏んとす。福信ます〳〵怒り無禮なる。匹夫どもゝ。福信は國の大臣ゆゑ無くして。收縛されんやと。右なる一人をとつて投げ。左に組むをくましもあへず。その利腕を捻ぢ揚げたり。福信王命に抵抗す。あれ打取れと下知しければ。次の間に匿れし數人の武士。劍戟を揮て擊てかゝる。福信は腰なる劍を扳んとするを。扳く間も無く左右より丁と

突出す手矛に脅腹を貫かれ。あと叫で尻居に倒と仆れたり。その時國王豐璋は奥の間よりあらはれ出で。この躰をみてから〳〵と嘲ひ。叛國の賊臣福信汝吾王妃と密通し吾を廢して。已百濟の王位に即かんとする隱謀すでに發覺せり。今はのがるゝ道はなし。首伏して死に就くべしといひしかば。福信左右の手にて。矛の柄をしかと握り。血迸る眼を見開き。王をはたと白眼み。子胥誅せられて。吳國滅し。范增退けられて楚亡ぶ。福信が血いまだ乾かず。百濟の亡びんと眼前に在り。やゝれ執得の腐狗痴奴恨らくは。秦將軍の言をきかずして。汝を戮せざる事をと。跳り上りて。執得の面に唾、きぬ。執得大に怒り跳りかゝりて。福信が首をけん。その掌を刀をもて穿ち繩を貫きて。やがてなほ飽き足らずや有その慘毒なる武士等も面を掩ふて見ざるもありき。王は執得がはたらきを賞し。さるにても。かの桃藥はいかにしつる。執得はやく福

信が館に馳せ向ひて。その郎従等盡く
し支ふるものあらば。これを皆殺にせよ。されど。桃葉一人は必ず
驚かさずして。これを生捕りて引きもて來れ。禰信が弟集斯はなほ
久麻喜怒城にありて。餘自信と共に城を守るよしなれば。俄にこれ
を誅戮すべくもあらず。今ことを急にするときは。反て禍を招くべ
しよてしか〳〵せよと命じける。執得うけ給り即ち使をもて禰信罪
ありて誅せられ終ぬ。されども。外に黨類なし。集斯はその弟なれ
ども。禰信が事に坐す可きに非ずなほ舊職に在りて忠勤を盡し候へ。
今より餘自信をもて佐平の上坐たらしめ。國政にあづかるべしとぞ
いはせける。斯て王はまた。宮中に入りて。王妃多氏を責めてこれ
を一室に幽閉し。侍妾等が仕ふる事をゆるさず。即日に牡丹をもて
王妃の位に即かしめ。執得を陞せて佐平とし。宮の内外の兵衞を掌
佐平餘自信と謀りて政事を行ふべしとぞ。敕令を下し遂に禰

信が一家のものを盡く殺して桃葉が自害せんとするをゆるさず。こ
れを捕へて宮中に曳き來り執得にあづけ置ける。又使をもて。秦田
久津が出陣せし大運府にあるむかしめ。禰信を誅戮せし趣を告ぐそ
の書は禰信唐國に内通し。ともに日本に向ひて。戰を挑み。幷に百
濟に王たらんとす。この事おほろげの風聞にあらず。その往復の密
書を得たり。よてこの事を表文に載せて日本の朝廷に注進に及ばん
とす。將軍それこれを察し給へとぞ載せたりける。
田來津書を得て大に驚けども事すでにこゝに至る。また奈何ともす
ると能はず。しかるに唐兵は民舍を放火し住民を殺戮せしのみ。地
を掠むるに及ばずして引き去りしかば。田來津もまたこれを追ふに
急に州柔にかへりしに。兵士等禰信が死せるときゝ。
怒らざるもの無く。進みて王宮に逼り執得を引出してこれを殺し。
王が罪を問はんとす。田來津これをとゞめて。王宮に至り。王に面

謁を求む。王病と稱して。對面せず。執得もまた公務多しとて出であはず。田來津退きて營所にかへるに兵士また大に騷ぎ宮中にせまらんとし。城の內外の人民もまた。佐平死せしときゝしかば。俄に起りて。そのよしを問はんとす。上下沸騰して禁ずべからず。王大に懼れて。いそぎ田來津を延きて對面しければ。田來津福信が誅せられしよしを詰るに。王福信が罪を稱し且唐使に往來せし書翰を出してこれを證とす。こは執得がかねて作り置きたる僞書なれども。工みに福信が書に摸造せしものなれば。眞僞を辨ずること能はず。田來津もまたこれを詰責するによしなし。王田來津に向ひ。州柔は。遠く田畝に隔り。土地磽确たり。農桑地に非ず。是れ拒戰の場なり。此に久しく處らば。民饑饉に苦みなん。避城に遷るべし。避城は西北は帶るに古連旦涇の水をもてし。東南は深浥巨堰の防によれり。繚らすに周丹をもてし。渠を決り雨を降らし。華實の毛は。すなは

ち三韓の上腴なり。衣食の源は即ち二儀の隩區なり。地卑といふとも。豈遷らざらんやとありければ。田來津これをよしとせず。諫めていひけるは。避城は敵の所在の間と一夜に行くべし。相近きこと茲甚し。若し不虞あらば。それ悔とも及びがたからむ。夫飢るは後なり。亡ぶるは先なり。今敵の妄りに來らざるゆゑは。州柔山險を設け置きて。盡く防禦とし。山峻く高くして。谿隘し守ること易くして。攻むること難きがゆゑなり。若卑き地に處らば。何をもつて搖動せずして今日に及ばむやと。王はこれを聽かず。唐兵はすでに進み戰ふの氣勢なく。新羅もまた唐を助くるの力なし。高麗うしろにせまり。百濟また前に在りて戰はずといへども。その勢制しがたかるべし。唐兵等糧盡き力疲れて遠からず。本國に引還さんこと必定なりとて。遂に避城に移るべきよしを命じ。次の日王は執得その餘の王官を從へ鹵簿を備へて避城にうつる。田來津もせん方なく。齒がみして憤

る兵士等を諭し。吾いはやく高麗に在留する下毛野將軍間人將軍と謀し合せ。大敵前に在り內亂を引き起さば。ゆゝしき大事たり。宮中を肅清して。又久麻喜怒城にも使をもて宮中の騷亂を馳せて。高麗の都に掃すべしとて。

いひければ。王大に喜び妃の賢徳は古賢婦といへども。
れに及ばんや。さらば召せとて桃葉を召す。さても桃葉は
死せしよしをきゝ。日夜悲歎の涙にくれて。自害せばやと思へども。
王の監宮の臣等またく隙なく。うち守れば。いさゝかの
くて又思ふやう。我君冤罪に死し給ひしは。これ王の失徳の致す所
とはいへ。恩率執得が讒言によれり。いかで執得を一刀怨みばや。
もし執得を打つと得ならずば王の心を惑し。王妃を退けしは。
といふ妖女の所爲なり。彼を一刀に斬殺さば。いさゝか我君の御心
泉下に慰むべしと。思ひしほどに。俄に王の召ありければ。窃に
た何の日を期すべきと。心は必ず。今日怨を晴さずば。髪化粧に
る一心を用ひ。綺羅やかなる衣服を着し。かの婦ぞあるべき。
　　　

喉を貫きて息絶えたり。王は愕て爲んすべを知ず。執得やある〳〵と呼はれども壹人も答るものなし。斯る所に。俄に王宮のうち騒がしく。戰皷激しく鳴て。喊聲天に響き。失火ありと覺しく。猛火忽ち〳〵と燃上れり。こはいかにと驚きて。走り出んとしたりしに。壹人の內官馳せ來り。唐兵俄に寄來り。又王宮にも內應の者ありといふ。言いまだ終らず。牡丹臺を指して馳せ來る一軍の眞先に馬に打乘り。いかめしく鎧たるものあり。近くまゝによく見れば。是即ち佐平の執得なり。王は大に驚き。こはいかにとあきれて。聲たへ出でず。その時執得はから〳〵と打笑ひ。おろかや豐璋汝不德をもて。いか で王位を穢すとを得べき。吾逆を去りて順に就き唐國に降り。その大兵を迎へたり。今は氣運の盡きぬる時なり。覺悟をきはめて自殺せよと罵りければ。後につゐきしその手のもの。皆口〳〵に唐兵はや城中に充滿たり。はやく國王を生捕れと呼はり〳〵走り寄り。あ

はや豐璋執得の手に捕はれんとせし處に。忽ち後陣の方騒がしく。唐兵散〳〵となりて敗走す。執得大に驚きこは何者ぞと。馬を廻らし。表の方に出でんとす。やおれ逆賊。逃るとも逃さんや。日本の將軍秦田來津こゝに在り唐兵五千餘騎はや城外にて打敗りしに。王宮危しときゝ。唯今此に走せ着きたり。いで逆賊の首を斬りて鬼室が靈を祭るべし。そこ退くなこ大刀を揮て斬てかゝる。執得あはてゝ戰ふ擴勢なく。馬に鞭ち逃れ去んとするところを。大喝一聲田久津が發石と打おろす太刀風に執得は首をきられて。むくろは馬より落たりけり。かくて。田來津は城中にとみ入たる敵勢を追散らしけるが。王はおそれて馬に打乘り。城をのがれ出で便宜の海岸より舟にのり。高麗に赴きしに途にて土冠の爲に襲はれ。はかなく命を落しけり。田來津はこれを追も留めず。走りて宮中に入りてみるに。王妃多氏はこの騒ぎに死れがたしと思はれけん。正服を着し端然とし

て自殺せり。田來津は淚を流しあゝ不幸なるかな此婦人吾帝の命を重んじ百濟王に嫁したりしに。王の放逸なるを諫めんと謀りしに反て仇となりて。身を亡せり。されど。貞操義烈は死すといふとも滅ぶ可からず。吾このよしを奏問して。贈位の勅を請ひ奉るべしと。士卒に命じ。厚く城中に葬らしめ。桃葉の屍は福信が死屍と同じく。これに州柔の城外龍岡山の麓に葬らしむ。今に至りて義勇の墓とて。故蹟を留めしといふ。斯て田來津は唐兵を追拂ひしかど。すでに執得が內應により。唐兵はやくも。百濟の境內に侵入しければ。州柔避城の兩營の兵を聚め。一軍とし。百濟の遺臣等をとゝめて。兩城を守らせ。田來津は久麻喜怒城なる集斯餘自信等に檄を傳へて兩軍齊しく唐兵を打ち拂ふべしと。はや即日に進發せり。さても唐將軍熊津の惣督劉仁軌仁願及將軍蘇定方は日本勢の威に怯ちて。本國の援兵の至るをまち。熊津に潛み居て。しばらく時の至

るをまちしに。百濟の佐平の執得が內應すべきよしを申來りしかば。大に喜び。即ち三將相議して。汝をもて百濟王にすべしと約し。竊に兵士を避城につかはし。こゝかしこに伏置き。一時に起りて。王城に打入りしかど。秦田來津が爲に敗られ。あまつさへ執得は殺されければ。用意合期せさりしかど。王はこの勢に懼れて高麗に逃れ。國中騷亂すときゝしかば。さらば此虛を擊てと。三將三手に分れ。一軍は劉仁軌これを率ゐて。船軍をもて白村江に向ひ一軍は劉仁軌これを率ゐて。久麻喜怒城に向ひ。一軍は州柔にぞ向ひける。秦田久津は唐兵が。未だ州柔に到着せざる先に軍を進しかば清流山の麓にて。蘇定方の軍と行合ひけり。田來津は驕がず。八千餘人の挺兵をもて。例の弩弓を射かけ。ひるむ所を長槍大劍を奮ひ散々に戰ひければ。定方の先陣いはや崩れかゝりて。本陣少し色めきし

ぞ。この圖を扳すなと田來津は馬の前輪を敲きて呼はりしかば。咄と叫びて。山下より南の麓に押しかゝりぬ。定方は平場の戰にのみ習ひて。かゝる險岨の戰は今日初めたりければ。思はずも途を失ひて。一軍忽ち敗れけり。田來津は長驅して。息を衝かず追かけしかば。百村江の港に到りぬ。

田來津は勢に乘じこゝまで到りしに。唐兵は何處にゆきにけん。その影だに見えず。さては海上に泣びて。熊津のかたに引退けんとて。白村江の船を多く駈り出させて。これに打乘るもの二百餘艘波を破て追かけたり。ゆくと未だ幾許ならず。唐國の兵艦五百餘艘こゝかしこの港よりあらはれ出たり。田來津はその兵の多をみて。大に驚きぬ。さては敵の計畧に陷ぬりしか。無念なれ。今は悔ともせんなし。ものどもの船を一文字に漕ぎ並べ敵の中央の陣わに乘入れよ。本陣の旗幟は大將蘇定方。かさらずば仁願仁軌にぞあらんずらん。我眞先

にこれに當らん。その餘は左右をきり靡げて。唐兵を水中に斬り落すべしと。軍令を下し。無二無三に乘かけたり。唐兵は軍艦を左右翼に張り雨の如くに箭を射かけ。各相近くとそのまゝ飛かゝりて。船にのり移り。兩軍入り亂れて。戰數刻に及びしが。唐の中軍やゝ亂て。漕退かんずるほどに。田來津は得たりと飛舸をはやめて。追かけ來つ劉仁軌に擊てかゝる。仁軌は船頭に立て衆兵を指揮したりしが。これをみて。あれは日本の大將秦某なるべし。いで手捕にし て。唐國に引かへらんと。船を漕ぎよせたり。田來津は得たりと舸に先よりひらりと。かの船に飛移り。太刀を揮て擊んとす。仁軌も同じく劍を扳て渡り合ふ。田來津が劍法妙を得て。日本の勢に敵しがたく。あはや。唯一刀の下に。兩段にならんとす。定方は海にこれをみて。劉將軍を擊たすなと。波を蹴て舟を進め。前後より飛箭をもてこれを圍みしかば。忽ち飛くる一箭に。田來津は肩を箆深に射

られ。思はず刀を取り落す。唐の兵士は首將を助けて。舟に飛のり。左右よりむづと組む。田來津は天を仰ぎて長嘆し。休みなん。休みなん。百濟王無道にして。爾信死せり。我何の面目ありて。歸朝して。天皇に見え奉らん。今は此までなりと。力士を左右にしかと取らへ。海にざんぶと飛入て。水屑となりて失にけり。大將すでに戰死しければ日本勢或は討れ。或は逃れて。戰こゝに果てにける。唐の二將軍は凱歌を奏し。艦船を整列し。討取りたる首級を實驗しけるほどに。海上俄に波濤を揚げて。戰艦幾百艘となく。皆日本の旗幟を海風に翻へして。押寄せ來りぬれば。日本の援兵到着せしよな。我兵は戰疲れ船も多く壞れぬ。只今新手の船艦にあはゝ勝敗覺束なしと。二將を始め。唐兵等いづれも懼れざるものなし。果せるかな高麗に屯營せし前將軍上毛野稚子間八大盖等が高麗の兵を先鋒として。百濟危く秦田來津が戰雄なりときゝ。其援兵として。

寄せ來るなり。されば。稚子大盖はすでに新羅と戰ひ。兩城を攻取りしかば。その勢に乘し。唐の三將を皆殺にせんと用意せしに。秦將軍の飛檄を聞きて時を移さず。軍を進めしかど。期後れて。日本の船軍大敗せしとの報に接し。大に驚き。且怒り諸軍に號令を傳へ。我日本の軍海外に偉勳を著せしと。神功皇后の御時より。幾度といふとを知らず。いまだ此の如く敗衂せしを聞かず。恥辱なり。雪がずば有る可らず。此行もし勝たざれば。三萬の軍壹人も生て本國にかへる勿れと。勇み進でよせたるなり。されども兩軍相對して。いまだ戰を接せず。互にその間隙を伺ふたり。斯る所に唐國の長安より蘇定方の軍が率行せしものにて。日本と兵を接して戰を開く可らず。宜く和を講し。好を結べし。朝廷より兵部尙書郭務悰をもて。遣日本使とし。すでに彼國に國書を贈られたり。よて蘇定方劉仁軌仁願等これ

を知悉し敢て怠ると勿れ。若し命に從がはずして。戰を開くとあらば。違勅をもて論せらるべしとなり。とありしかば。蘇定方大に懼れ船艦をとゝめて。矢石を發するとをゆるさず。使を久麻喜怒城に遣して。仁軌に告げ。圍を解きて引きかへらしめ。日本の大將に書を贈りて本國の勅意を告げて。和睦を求む。

下毛野稚子は戰の用意全く整しかば。直に使をもて。戰を挑まんとせしほどに。又忽ち朝廷の勅使ありて。飛舸をもて詔命を賜ふ。これ內臣中臣鎌子が奉行せし所にて。唐國の使臣來朝して。和睦の事を請はる。其辭甚懇切にして且禮有り。こゝをもて皇太子俄に敎令を下されて合戰を止めさせ給ふの旨なりければ。稚子大に つゝしみて。これを領受し。遂に唐國の將軍等と盟約を結び。新羅の降を納れ朝貢を定め。大軍恙なく。歸朝したりけり。さてかの生擒の續守言は唐に歸るとを得たりき。是に於て外事全く局を結びしかど。餘

自信鬼室集斯貴智等新羅の民たるを願はず。百濟先王の庶子善光と いふものを奉じ。日本に歸化しければ。皇太子その忠節を賞させ給ひ。善光には。百濟王の爵を授け。才によりて集斯等に官爵を授け。才によりて官に任せらる。今なほ。百濟の人我日本にその子孫多きは。皆此等の人の子孫とぞ聞えける。斯くて皇太子は天皇の位に即き。海內寧謐に歸し。その威德海外に輝けり。これまかしながら。武を耀かして。威を黷がさず。德を基として。勇に誇り給はざるの功なるべし

版權所有

明治二十七年七月二十日印刷
明治二十七年七月廿三日發行

著述者　東京市神田區小川町一番地　依田百川

發行者　東京市京橋區鎗屋町十五番地　手塚猛昌

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　島連太郎

發行所　東京市京橋區鎗屋町十五番地　庚寅新誌社

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

44
283

塞山健兒著

慶應義塾之學風

全壹冊　代價金捨六錢〆金十八錢也
郵稅貳錢　郵便切手代用は〆貳拾錢也

目次

第一緒論●第二義塾の組織●第三義塾の歴史●第四特種の學風●第五義塾の教育法●第六演說館及び諸倶樂部●第七學生の特質●第八學生の風俗氣習●第九福澤先生感化力●第十自然の感化力●第十一師弟の關係●第十二義塾と塾員との關係●第十三先輩と後進との關係●第十四結論●通計十四編二十六章

近時學校の澤山なる、中學程度以上の學科を教ふる所、何んぞ唯慶應義塾に限らん、然れども校長の交代、教員の轉免、率ね頻繁にして、未だ曾て學風の觀るべきもののあらず、偖り慶應義塾は創立以來年を歴ること最も長きに拘らず、始終福澤先生の監督する所にして、其の特殊なる學風は、常に學生を感化薫陶して、有用の器となす、本書は乃ち其の學風を詳述したるもの、又子弟たるもの、共に一讀すべき良書なり

吉田東洋先生著

日清韓三國對照

朝鮮變亂詳細地圖

上等彩色鋼板摺

定價金拾五錢
郵稅二錢
郵券代用は金十九錢

製本美麗帙入

發行　三友社

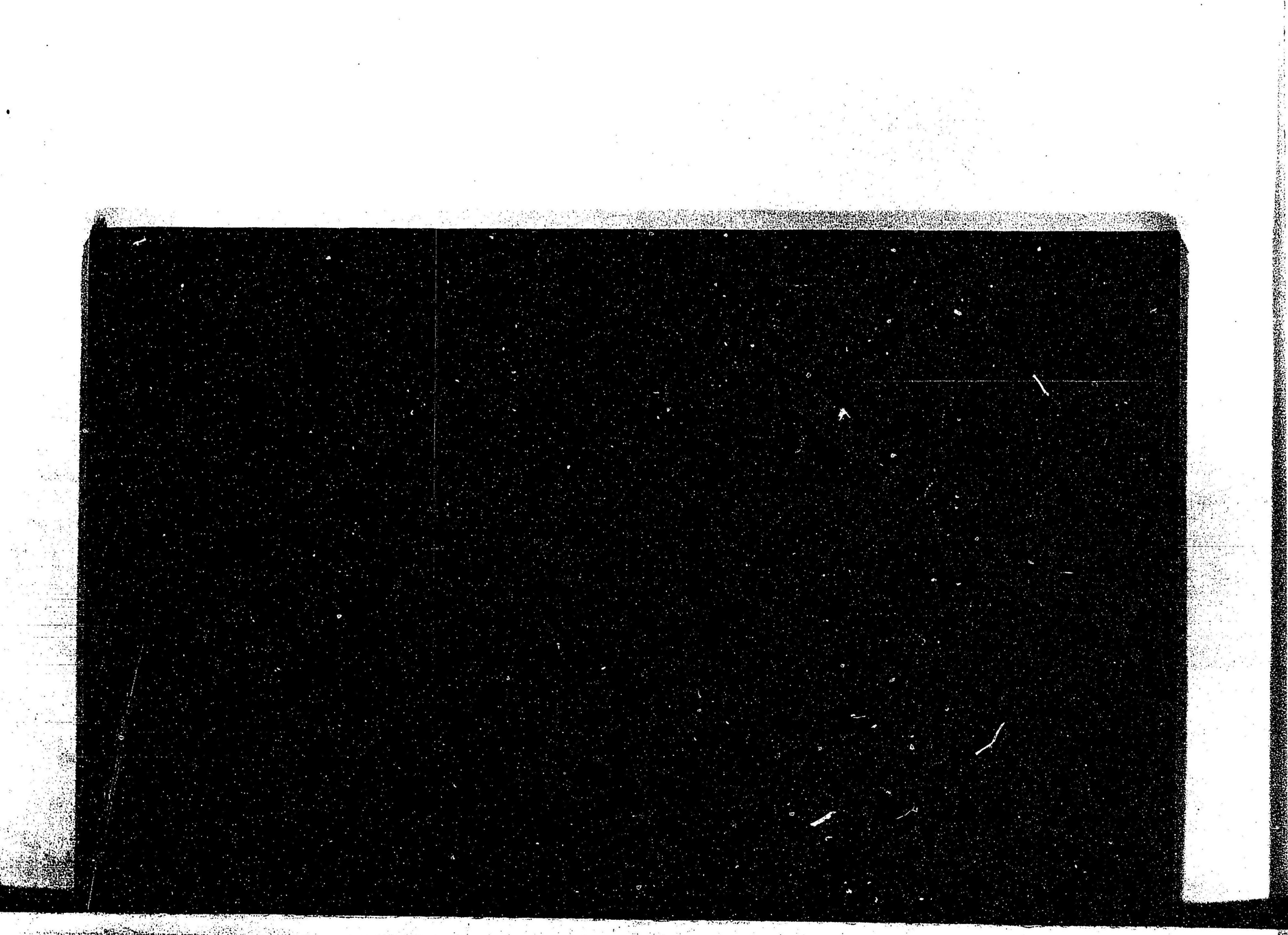
詳細明晰東亞の案内たる者天下此圖に過ぐるなし曩に朝鮮の警を聞くや地圖極て乏しく有も亦詳ならず弊社乃ち吉田東洋先生に請ひ其編成中に係る東方亞細亞圖中より目下急要の部分を得て發行し天下の有志者諸君に頒つ此圖を披けば三國の形勢兵力並に變亂の都邑の距離要港の里程より豊公の征韓の跡に至る迄一目之を了すべし

○六月廿八日發賣

發賣所　東京京橋區槍屋町　庚寅新誌社

東京 庚寅新誌社藏版

44
283

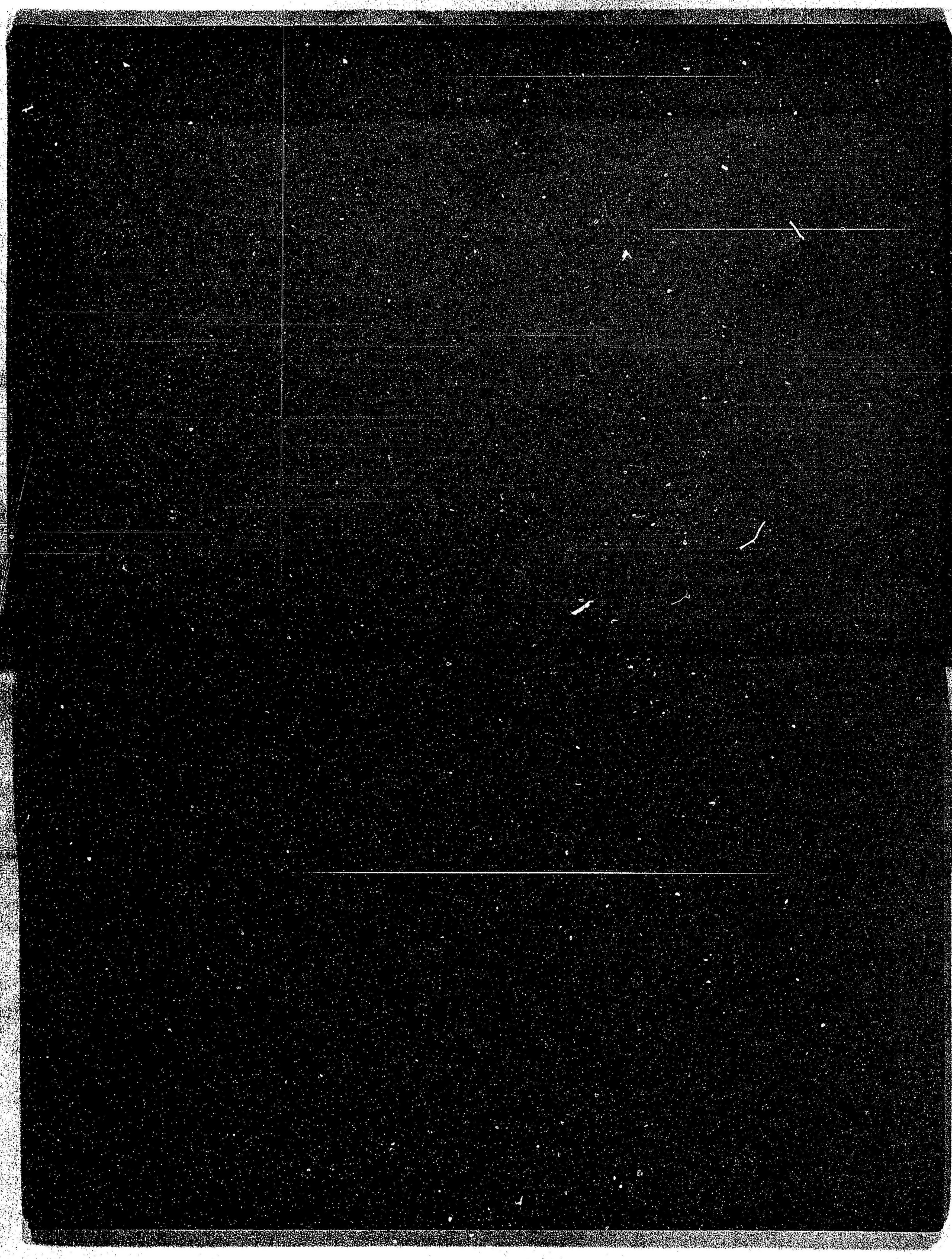


029480-000-8

44-283

援韓雄略

依田　学海／著

M27

BAG-0016